富山県婦中町

県営担い手育成基盤整備事業に係る
埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書

―婦中南部地区・千里地区―

2000年3月

婦中町教育委員会

序

婦中南部地区において策定された県営担い手育成基盤整備事業は、低コスト化農業を目指した大区画化による基盤整備を行う事業であります。婦中町教育委員会では、それに先立ち事業区域の文化財を保護するため、５ヶ年にわたり試掘調査を実施してきました。本書はその成果をまとめたものです。

我が町、婦中町は自然に恵まれた町です。今回試掘調査を実施した地域も、東には井田川の清流、西には緑豊かな丘陵があるという素晴らしい環境にあります。自給自足に適したこの地は古くから居住地として選ばれ、地中に眠る遺跡からは、先人達が歩んできた長い歴史を辿ることが出来ます。

調査の結果から、熊野道・島田地区には弥生時代から中近世に至るまでの集落、上吉川地区には弥生時代と中近世、千里地区には古代から中世に至る集落跡があったことが分かり、各時代の遺構や遺物が確認されました。これらは、当時の社会や人々の生活の変遷などを考える上で、大変に貴重なデータを提供してくれるものです。

本書が、多くの人々に活用され、郷土の歴史を知っていただき、文化財保護に対する一層の理解の一助となれば幸いと存じます。

最後に、調査に御協力、御指導頂きました地権者の方、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い致します。

平成12年３月

婦中町教育委員会

教育長　宮島信一

例　言

1　本書は、富山県婦負郡婦中町神保地区における埋蔵文化財包蔵地の試掘調査報告である。

2　調査は、県営担い手育成整備事業（婦中南部地区、千里地区）の実施に先立ち、富山県農地林務部富山農地林務事務所の依頼を受けて、婦中町教育委員会が実施した。

3　調査事務局は、婦中町教育委員会生涯学習課に置いた。平成６年度から平成７年度は文化振興係長見波重尋が調査事務を担当し課長平井光雄が総括、平成８年度から平成10年度は文化振興係長山田茂信が調査事務を担当し課長鍋山徹が総括、平成11年度は文化振興係長山田茂信が調査事務を担当し課長見波重尋が総括した。

4　分布調査及び試掘調査の期間・面積・担当者等の詳細は、本文並びに第１表・第２表を参照されたい。

5　本書の編集は、婦中町教育委員会文化財保護主事片岡英子と同嘱託職員小島あずさがこれに当たった。全ての文責は片岡にある。

6　発掘調査・報告書作成業務の参加者は次の通りである。

小島あずさ・野原大輔・近藤美紀・河西英津子・勾坂友秋（嘱託職員）

生田寿美子・中坪千春（整理作業員）

7　資料整理期間中、富山県埋蔵文化財センター・久々忠義氏から有益な御教示・助言を頂いた。また、遺物写真撮影については、場所・器材などを城端町教育委員会に借り、同教委の大平奈央子氏・宮崎順一郎氏の御協力を得た。以上の方々に、記して厚く感謝申し上げたい。

8　発掘調査作業員の確保については、婦中町シルバー人材センターの御協力を得た。また調査にあたっては、地権者並びに地元の方々に多大な御協力を得た。記して謝意を表する。

9　出土・採集遺物及び記録資料は婦中町教育委員会が保管している。

10　その他

(1)　トレンチの表記はT～とした。トレンチ番号は現場で使用したものをそのまま使っており、新たに整理したものではない。そのため、同一遺跡で同じ番号があったり、調査によっては遺跡や試掘の亜を判別する為のアルファベットやローマ数字がつけられているものもある。

(2)　写真図版中の遺物番号は実測図の番号と一致する。

(3)　方位は真北、水平基準は海抜高である。

本文目次

序文・例言・目次
Ⅰ 序 章……1
第1節 遺跡の立地と歴史的環境……1
第2節 調査に至る経緯と分布調査……2
第1項 調査に至る経緯……2
第2項 分布調査の経過と結果……2
Ⅱ 試掘調査の概要……4
第1節 試掘調査の経過……4
第2節 試掘調査の結果……6
第1項 上吉川Ⅰ遺跡……6
(1) 概況と層序……6
(2) 遺 構……6
(3) 遺 物……6
(4) 小 結……6
第2項 西余川Ⅰ遺跡……7
(1) 概況と層序……7
(2) 小 結……7
第3項 南部Ⅰ遺跡……7
(1) 概況と層序……7
(2) 遺構と遺物……7
① 弥生時代終末～古墳時代初頭……7
a 器種分類……7
b 北 部……12
c 中央部……12
d 南 部……13
e 小結—南部Ⅰ遺跡の弥生終末から古墳初頭 ‥14
② 古 代……14
a 器種分類……14
b 北 部……16
c 中央部……16
d 南 部……16
e 小結—南部Ⅰ遺跡の古代……17
③ 中 世……17
a 北 部……17
b 南 部……18
c 小結—南部Ⅰ遺跡の中世……18
④ 平成10年度調査Dトレンチ……19
a 概況と層序……19
b 遺 構……19
c 遺 物……19
d 小 結……19
(3) 参考～南部Ⅰ遺跡・高日附地区採集遺物～ ‥‥19
第4項 南部Ⅱ遺跡……22
(1) 概況と層序……22
(2) 遺 構……22
(3) 遺 物……22
(4) 小 結……22
第5項 千里A遺跡……23
(1) 概況と層序……23
(2) 小 結……23
第6項 千里B遺跡……23
(1) 概況と層序……23
(2) 小 結……23
第7項 千里D遺跡……23
(1) 概況と層序……23
(2) 遺構と遺物……23
(3) 小 結……23
第8項 千里E遺跡……23
(1) 概況と層序……23
(2) 遺 構……23
(3) 遺 物……23
(4) 小 結……23
Ⅲ 事業区域外における試掘調査……24
Ⅳ まとめ……26
参考文献・図版・報告書抄録

挿図・表目次

第1図 周辺の遺跡分布図及び一覧
第2図 分布調査対象範囲
第3図 分布調査による遺跡推定範囲
第4図 試掘調査対象範囲
第5・6図 弥生終末～古墳初頭・器種分類図
第7図 古代・器種分類図
第8・9図 南部Ⅰ遺跡・Dトレンチ平断面図
第10図 事業区域外における試掘調査位置図
第11図 遺跡分布図
第12図 南部Ⅰ遺跡 弥生終末～古墳初頭集落範囲
第13図 南部Ⅰ遺跡 古代集落範囲
第14図 南部Ⅰ・Ⅱ遺跡 中世集落範囲
第15～26図 試掘調査概要図
第27～42図 遺物実測図
第1表 担い手育成基盤整備事業に係る分布調査一覧
第2表 担い手育成基盤整備事業に係る試掘調査一覧
第3表 事業区域外における試掘調査一覧
第4表 担い手育成基盤整備事業に係る遺跡総括表

Ⅰ 序　　章

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

婦中町は県中央部にあり、地形は西の丘陵部と東の平野部に二分される。本書で報告する県営担い手育成基盤整備事業に係る遺跡は町中央南側に位置し、神通川の支流である井田川の扇状地上に分布する。

周辺の遺跡は、旧石器から近世に至るまでの幅広い時代のもので、それらは西側丘陵部の他、平野部では井田川・山田川やその支流に挟まれた微高地上に形成される。弥生終末期には丘陵・平野を問わず多くの集落が出現するが、それ以前に形成されたものは中期の千里Ｃ遺跡があるのみである。墓には銚坂墳墓群・富崎墳墓群に方形墳丘墓がある他、四隅突出形墳丘墓の富崎１号墓・六治古塚、前方後方形墳丘墓の向野塚などがある。古墳時代になると南部Ⅰ遺跡などの集落の他、前方後方墳である王塚古墳・勅使塚古墳や、方墳・円墳・前方後方墳がある富崎千里古墳群がある。古代の遺跡としては、新町Ⅱ遺跡、下邑東遺跡、翠尾Ⅰ遺跡など多くの遺跡がある。

中世の遺跡としては、小倉中稲遺跡、翠尾Ⅱ遺跡などの集落遺跡の他に、千坊山遺跡には屋敷跡が、丘陵部には富崎城跡などの山城がある。尚、今回調査した中の一つである南部Ⅰ遺跡は、南側が八尾町翠尾Ⅰ遺跡と接しており、弥生時代から中世にかけて断続的に形成された大規模な複合遺跡として一つに繋がるものである。

番	遺跡名	主な時代
1	上古川Ⅰ	縄文、弥生、古代、中世、近世
2	南部Ⅰ	弥生、古墳、古代、中世、近世
3	南部Ⅱ	中世
4	千里Ｂ	古代、中世、近世
5	千里Ｃ	弥生、古代、中世
6	千里Ｄ	古代、中世、近世
7	千里Ｅ	古代、中世、近世
8	千里Ｆ	古代
9	小倉中稲	古代、中世
10	小倉中稲Ⅱ	中世
11	翠尾Ⅰ	弥生、古代、中世
12	翠尾Ⅱ	中世
13	田中館跡	中世
14	富崎千里古墳群	古墳？
15	富崎	弥生、古墳、古代、中世、近世
16	富崎南野	縄文、古代、中世
17	富崎城西	縄文
18	富崎城遺跡	縄文、弥生、中世
19	殿治南	弥生、古代、中世
20	銚坂墳墓群	弥生
21	銚坂Ⅱ	中世
22	千坊山	旧石器、縄文、弥生、古代、中世、近世
23	六治古塚	弥生、古代、中世
24	向野塚	弥生
25	古里保健園前	縄文、弥生
26	各願寺前	縄文、古代、中世、近世
27	勅使塚古墳	古墳
28	王塚古墳	古墳
29	新町Ⅰ	古代
30	新町Ⅱ	縄文、古代、中世、近世
31	番ノ山古墳群	古墳
32	下邑	縄文、古代、中世、近世
33	下邑東	古墳、古代
34	鍋ヶ城	中世

第１図　周辺の遺跡分布図及び一覧(1/30,000)

第２節　調査に至る経緯と分布調査

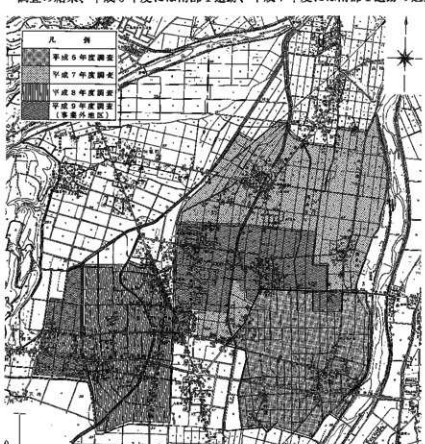
第１項　調査に至る経緯

平成６年度、婦中南部地区において、県営担い手育成基盤整備事業が策定された。本事業は、農地を担い手に集積し経営規模を拡大させることで低コスト化農業を目指すものであり、田の大区画化による基盤整備を行うものである。事業計画地域は「南部地区」と呼称され、神保地区の熊野道・島田・上吉川・余川などl71haの広域を範囲とした。また、工期は計画段階では、平成７年度から12年度までとされた。しかし、この地域における遺跡の分布状況は、現在は南部Ⅰ遺跡内に含まれる高日附遺跡が周知されていた以外は、全く把握されていない状況にあった。その為、事業策定に伴い、緊急に埋蔵文化財についての協議を実施した。参加機関は、県教育委員会、婦中町教育委員会、県農地林務事務所、地元土地改良区で、協議の結果、まずは工事に先立つ分布調査を行い、遺跡の有無・範囲・遺存状況を把握した後、必要であれば工事計画を見直し、その保存措置を講じるための処置を取ることになった。その後、平成７年度には、「千里地区」にも本事業が策定（工期：平成８～13年度予定、地区面積55.3ha）された為、当地区についても「南部地区」と同様の手順で進めることになった。

第２項　分布調査の経過と結果

分布調査は、平成６年度から始まり平成８年度まで３ヶ年にわたって実施した。また、その後の平成９年度には、事業外地区で、圃場整備事業に係る分布調査対象範囲に挟まれた場所に位置する未調査地区を踏査し、前年度までに分からなかった遺跡の繋がりを確認した。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターと富山大学考古学研究室の協力を得た。

調査の結果、平成６年度には南部Ⅰ遺跡、平成７年度には南部Ⅰ遺跡の延長部分、上吉川Ⅰ遺跡、西余川遺跡において遺物の散布を確認した。平成８年度には千里Ｄ・Ｅ遺跡を新たに確認した他、周知の千里Ｂ遺跡でも遺物を採集した。千里Ａ遺跡については、周知の遺跡ではあるものの遺物は採集されなかった。事業区域における遺跡推定地は、周知のもの２箇所を含めて７箇所となり、遺跡推定面積の合計は約156.5haとなった。尚、平成９年度には、事業区域外において、南部Ⅰ遺跡の延長部分と周知の千里Ｃ遺跡に遺物の散布を認め、これらを含めると遺跡推定地は８箇所、面積は約225haに及ぶ。



第２図　分布調査対象範囲(1/30,000)

以上の分布調査については、詳細な内容を第１表に、調査対象範囲を第２図に、分布調査による遺跡推定範囲を第３図に載せている。

期間（実働日数）	調査担当者	対象面積（ha）	遺跡推定地名称	遺跡推定面積（㎡）	遺物	第3図No
H6.4.13（1日間）	婦中町教育委員会 文化財保護主事 片岡 美子 富山県埋蔵文化財センター 主任 久々 忠義 〃 神保 孝造 文化財保護主事 高梨 清志 〃 河西 健二	97.7	南部Ⅰ	600,750	弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、青磁、瀬戸、越中瀬戸、唐津、伊万里	3
平成6年度小計				600,750		
H7.4.19～4.20（2日間）	婦中町教育委員会 文化財保護主事 片岡美子	123.8	上吉川Ⅰ	417,000	須恵器、土師器、珠洲、瀬戸美濃、瓦器、越中瀬戸、伊万里、近世陶磁器	2
			西余川Ⅰ	79,000	須恵器、越中瀬戸、近世陶磁器	1
			南部Ⅰ	103,000	須恵器、土師器、近世陶磁器	3
平成7年度小計				599,000		
H8.4.17～4.19（2日間）	婦中町教育委員会 文化財保護主事 片岡 美子 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 高梨 清志	88.8	千里A	14,000	無（既存範囲そのまま）	5
			千里B	34,000	土師器、珠洲、近世陶磁器	7
			千里D	180,000	土師器、瀬戸美濃、瓦器、五輪塔、近世陶磁器	6
			千里E	137,000	土師器、珠洲、中世土師器、銅銭、近世陶磁器	4
平成8年度小計				365,000		
※事業外 H9.4.9～4.10（2日間）	婦中町教育委員会 文化財保護主事 片岡 美子 瀬内 大介 嘱託職員 河西英津子 勾坂 友秋	91.0	南部Ⅰ	676,000	須恵器、土師器、近世陶磁器、石臼	3
			千里C	9,000	須恵器	8
※平成9年度 千里・高日附事業外地区 小計				(685,000)		
合計 ※（ ）は事業区域外含む		310 (401.3)		1,564,750 (2,249,750)		

第1表　県営担い手育成基盤整備事業に係る分布調査一覧

第3図　分布調査による遺跡推定範囲(1/20,000)

Ⅱ　試掘調査の概要

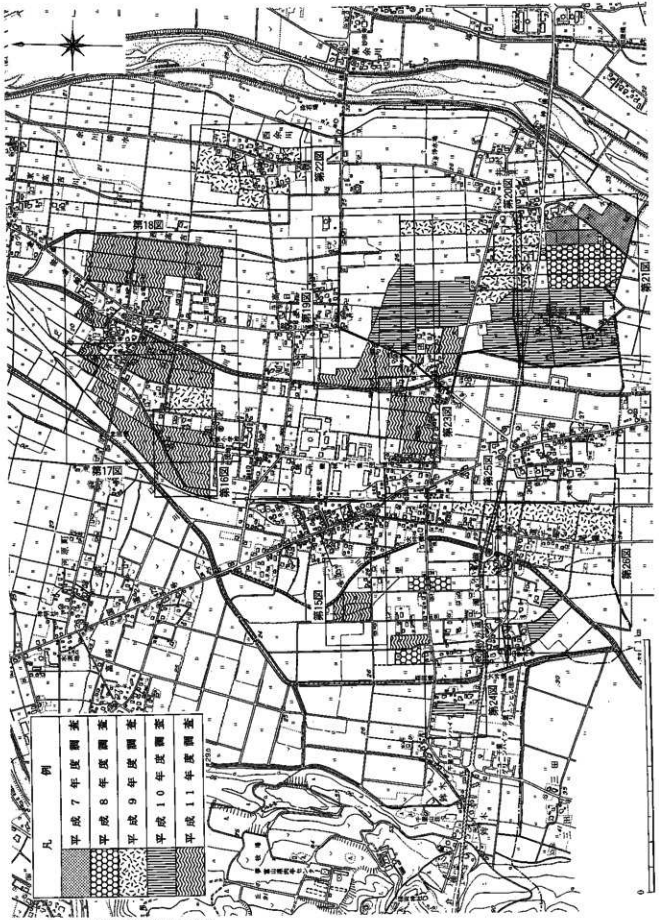
第１節　試掘調査の経過

分布調査で確認された遺跡推定地については、場合によっては工事の施工法等の変更や調整が必要になる為、早急な試掘調査による遺構の有無、範囲、遺存状況などの把握が必要になってきた。そこでまずは農地サイドとの協議によって、工事計画上優先すべき場所から順に試掘調査を実施した。調査対象面積は約77haに及び、調査は５ヶ年にわたった。調査では、バックホウ及び人力により地表面から地山面までを掘削し、遺構・遺物の遺存状況を確認した。試掘トレンチは幅１～1.5ｍで、約2.3haを発掘した。トレンチ断面の図化方法は、平成６年度は地表面を基準として測量していたが、地表面のレベルはバックホウの沈み具合によって左右される事や将来的な開発にも対応できるようにする為、平成７年度からは標高を基準とした。

各年度の試掘調査の概略は第２表にまとめてある。

	期　間（実働日数）	調査担当者	遺跡推定地名　称	対象面積（㎡）	発掘面積（㎡）	遺構遺存面積（㎡）	備　考
平成七年度	H７.６.15～６.23（６日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子	南　部　Ⅰ	20,000	702	0	
	H８.３.18～３.22（４日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子	南　部　Ⅰ	16,000	588	0	
	小　計			36,000	1,290	0	
平成八年度	H８.８.12～９.６（14日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子 堀内　大介	南　部　Ⅰ	48,000	1,407	0	
	H８.12.２～12.３（２日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　堀内　大介 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事　高梨　清志	千　里　D	13,000	422	900	
	小　計			61,000	1,829	900	
平成九年度	H９.４.23～６.６（24日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子 堀内　大介 嘱託職員　河西美津子 匂坂　友秋	南　部　Ⅰ	62,000	633	0	
			西会川Ⅰ	54,000	763	0	遺跡消失
			千　里　D	5,000	147	0	
			千　里　E	55,000	2,035	8,900	
	H９.８.８～８.11（２日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子 嘱託職員　河西美津子	南　部　Ⅰ	6,000	198	198	
	小　計			182,000	3,776	9,098	
平成十年度	H10.５.７～12.４（48日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子 堀内　大介 嘱託職員　近藤　美紀 小島あずさ	南　部　Ⅰ	158,000	8,715	145,000	
			千　里　B	7,200	223	0	
			千　里　D	8,800	328	0	
	小　計			174,000	9,266	145,000	
平成十一年度	H11.５.７～６.25（24日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子 堀内　大介 嘱託職員　小島あずさ 野原　大輔	南　部　Ⅰ	42,900	1,154	4,200	
			上吉川Ⅰ	164,000	2,058	10,680	
			千　里　A	18,400	324	0	遺跡消失
			千　里　D	7,800	248	0	
	H11.10.８～11.４（14日間）	綾中町教育委員会 文化財保護主事　片岡　美子 堀内　大介 嘱託職員　小島あずさ 野原　大輔	上吉川Ⅰ	50,000	1,814	4,920	
			南　部　Ⅱ	35,000	1,455	3,320	
	小　計			318,100	7,053	23,120	
合　計				771,100	23,214	178,118	

第２表　県営担い手育成基盤整備事業に係る試掘調査一覧


凡例
平成7年度調査
平成8年度調査
平成9年度調査
平成10年度調査
平成11年度調査
第18図
第17図
第15図
第23図
第25図
第24図
第21図
第22図
第26図
第27図
第28図
第29図
第30図
第31図
第32図
第33図
第34図
第35図
第36図
第37図
第38図
第39図
第40図
第41図
第42図
第43図
第44図
第45図
第46図
第47図
第48図
第49図
第50図
第51図
第52図
第53図
第54図
第55図
第56図
第57図
第58図
第59図
第60図
第61図
第62図
第63図
第64図
第65図

第２節　試掘調査の結果

第１項　上吉川Ｉ遺跡（第16・17・18図）

(1) 概況と層序　赤江川と西高吉川に挟まれた地域に位置し、南は南部Ｉ遺跡に接する。調査では、赤江川・峠川・西高吉川流域では遺構は検出されなかった。遺構が確認された地域での基本層序は、峠川東側では１層：暗灰黄色土（耕作土）、２層：床土、３層：オリーブ褐色土＋灰オリーブ色土（古代遺物包含層）、４層：黄褐色砂または黄褐色粘質土（地山）、峠川西側では、１層：オリーブ褐色土（耕作土）、２層：暗灰黄色シルト、黒褐色シルト、灰色シルト等（盛土）、３層：灰色土（中世遺物包含層）、４層：黄褐色砂（地山）となる。

(2) 遺構　縄文時代晩期の土坑、弥生終末期の溝・土坑、古代の溝、中近世の溝・土坑・ピットなどを検出した。その他、複数の時代の遺構検出面が同じである為、多くの遺構は時期が不明確である。

縄文時代の遺構では、T55に石が多く入る1.3m四方の隅丸方形の土坑を確認した。弥生時代終末期では、T75で壺が口縁部を真上に向けた状態を保って出土した。土層観察から底面が平坦な浅めの土坑内に、床面の高さに口縁がくるようにして埋められていた事が分かる。T71～80には弥生時代～中世の溝が数条南北に走っている。T105～110には中近世の掘立柱建物が数棟建っていたと考えられ、柱根が遺存しているものもあった。

(3) 遺物（第27図）　縄文土器、弥生土器、木製品、古代土師器、須恵器、珠洲、青磁、漆器、越中瀬戸、伊万里が出土している。また、調査区中央に位置する龍王社境内には室町時代の五輪塔空風輪があった。弥生・古代の遺物は小破片である為殆ど図示し得なかったが、判別できる限りでは、弥生土器には甕・壺・蓋、須恵器には杯・蓋、甕、古代土師器には椀（黒色・内黒含む）・甕などがあった。尚、土器の分類は第５～７図を参照されたい。

１～４は、縄文土器。１～３はT55土坑内から出土。晩期初めの御経塚式。１は深鉢で、口縁近くは横位の、胴部は右下がりの条痕を施す。２は口縁が内屈する浅鉢で波頂部の三叉文と縄文地の楕円文を組み合わせる。外面は赤彩。４はT78から出土した浅鉢で、口縁部に鎖線状の沈線、胴上部に沈線３条、その下に縦位の条痕文を施す。晩期中葉の中屋式。５・６は木製品。５は組合わせ式の鍬。７は弥生時代の壺C2。丸底で肩の張り出しが強い。口縁部外面にヘラ書きを施す。８は古代の墨書土器。墨の残りが悪く、読み取りにくい。髪のような縦線が見え、人面墨書土器の可能性もある。９・10は古代土師器の椀。９は椀B2で、内面に黒色処理を施す。10は椀A1で、底部に回転糸切り痕を残す。11～15は非ロクロ成形の中世土師器。11は器高が低く、体部が内湾して立ち上がり、口縁端部は先細りする。12は内湾気味に立ち上がる体部を持つ。弥生時代の壺の可能性もある。13・14は厚手で、平らな底部から直線的に外傾する体部を持ち、体部外面に指頭圧痕を残す。15は口縁端部を面取り、体部は一段ナデし、内面にハケメを残す。15は13世紀、11・13・14は15世紀。16・17は青磁の碗で、16は外面にやや細めの蓮弁文を施し釉はオリーブ色、17は体部内面に菊花文を施し釉は緑色を帯びた青灰色を呈する。18は珠洲擂鉢で卸目が摩滅している。19は漆器で、器高が低くて底部径が大きく、削り出す程度の高台を持つ。上塗色は内外面・高台裏に黒色漆を塗り、赤色漆で内外面に草木文を描く。中世前半。20～23は越中瀬戸丸皿。21・22は削り出し高台で、内底面に釉止めの段がある。22と23の高台裏には墨書で「十」などを記す。20は灰釉、21は鉄釉、22・23は鉄釉。

(4) 小結　調査では、縄文時代晩期（御経塚式、中屋式）、弥生時代終末期（月影Ⅱ式期）、古代、中世（13世紀、15世紀）、近世の遺構・遺物を確認した。峠川東側では、複数の時代（弥生・古代・中近世）の遺構が同一の面で検出された場所が多く、遺構面は１～２面のみである。遺物包含層は主に古代に帰属すると推測する。一方、峠川西側では、中世（13世紀、15世紀）、近世の遺構・遺物を検出した。中世の遺物の殆どは西側地区より出土したものである。尚、今回遺跡範囲とした内には未調査地区も多く、今後の調査で範囲から外れる場所もあると考えられる。また、峠川を境にして南部Ｉ遺跡と繋がる東側エリアと中近世のみの西側エリアという別の遺跡に分かれる可能性もある。

第２項　西余川Ｉ遺跡（第22図）

(1) **概況と層序**　井田川左岸に位置する。基本層序は、１層：黄灰色シルト（耕作土）、２層：暗オリーブ灰色粗砂、３層：旧耕作土と床土・畝土の互層、４層：植物遺体混じりの粘質土（旧沼地）、５層：灰色粗砂（地山）、６層：礫（地山）となる。

(2) **小結**　土師器、越中瀬戸、伊万里が出土したが、遺構は無かった。調査より一帯は井田川の氾濫源であったと考えられ、散布していた遺物は流れ込み及び近現代の西余川集落のものと考える。

第３項　南部Ｉ遺跡（第19～21図）

(1) **概況と層序**　峠川と西高吉川に挟まれた微高地上に位置し、南北に細長く伸びる大規模な遺跡である。同じ微高地上には他にも近接して遺跡があり、北は上吉川Ｉ遺跡と、南は八尾町翠尾Ｉ遺跡と接する。遺跡の一部の地区は、今回の分布調査以前に既に周知の遺跡として認識されていた（高日附遺跡、小倉雑水河原遺跡）。一帯の層序は、場所によって大きく異なる。調査区東側と西側の層序からは、河川の影響が強く窺え、遺構は検出されなかった。遺構遺存範囲における層序は、多時期に渡る大規模な遺跡であることから、ひとまとめに述べることはできない。遺物包含層の年代は弥生・古代・中近世であり、南側では全時代の遺物包含層が重なって層を成している場所も多い。その一方で、耕地整理や河川の氾濫等による土地の改変により、遺物包含層や遺構面が削平されている場所もある。

(2) **遺構と遺物（第28～42図）**　遺構としては、弥生終末～古墳初頭の竪穴住居・溝・土坑・ピット、古代の掘立柱建物・竪穴住居・溝・土坑・ピット、中世の溝・土坑・ピット・井戸などを検出した。遺物には、弥生終末期～古墳初期の土器、古代の土師器・須恵器・轆羽口・鉄滓・土錘、中世の中世土師器・珠洲・八尾・越前・青磁・白磁・瀬戸美濃・瓦器、土鈴、鉄製品、近世の越中瀬戸・伊万里・唐津・石臼・極底などが出土した他、熊野社境内には五輪塔（空風輪・火輪・地輪）や板碑といった中世の石造物があった。調査は試掘調査であり遺構内の掘削等の詳細な調査は行っていない為、遺構毎の遺物の共伴関係は不明確なものが多い。

以下には遺構・遺物の詳細を記述するが、調査対象地域が広域にわたる為、各時代毎に２～３つの地区に分けて行う。

① **弥生時代終末～古墳時代初頭**　遺構・遺物の記述は、北部、中央部、南部に三分して行う。遺物の説明については、紙面の都合上、次に記述する土器の器種分類を基に簡潔に行いたい。

ａ．器種分類（第５・６図）

全体の器形が分かるものは少なく、主に口縁形態を中心に分類を行った。土器の形態はバラエティーに富み、細かく分類した結果、やや繁雑になってしまったことを御了承頂きたい。

甕

（甕Ａ）擬凹線有段口縁甕。調整は、体部を外面ハケ、内面ヘラ削りする。

A1　きちんとした段をなす口縁部をもつ。A1aは口縁部が直立、A1bは外反し、両者ともに頸部が極短い筒状に立つものもある。また後者には指圧痕を残すものもある。

A2　口縁部内面は明確な段をなさず、外面も小さな段のみのもの。

（甕Ｂ）無文有段口縁甕。体部を外面ハケ、内面ヘラ削りまたはハケ。

B1　きちんとした段をなす口縁部をもつ。B1aは口縁帯が短く、頸部から有段部屈曲点までが長めに外反して伸びる。B1bは口縁部が直立するもので、段が丸みをもち内彎して立ちあがるものもある。B1cは口縁部が外反する。B1dは極短い筒状に立つ頸部に、短い口縁部が直立する。

B2　口縁部内面が段をなさず、外面も小さな段のみのもの。B2aは口縁部が短く直線的であり、B2bは外反して伸びる口縁部外側下端に突出部を巡らすことで段にする。後者は大型品が多い。

（甕C）「く」の字状口縁甕。調整はC2c以外、体部を外面ハケ、内面ヘラ削りまたはナデ。

C1　能登型甕またはその影響が考えられる甕で、口縁端部を平坦に仕上げる。C1aは口縁端部を摘み上げる。C1bは口縁端部を面取りするもので、擬凹線を施すものもある。

C2　口縁端部を丸く仕上げるもの。C2aは頸部が丸みをもって彎曲し、口縁部が強く外反する。C2bは鋭く屈曲する頸部に外反する口縁部がつく。C2cは最大径が体部中位ややや上方まで下がる撫で肩タイプで、外反する口縁部がつく。底部は小さな平底もしくは丸底。調整は外面ハケまたはヘラ削り、内面ハケまたはヘラ削り。

（甕D）受口状口縁部を持つ甕。口縁部が緩く上方に屈曲し、端部を面取りする。口縁部外面を加飾する。近江系の系譜。

壺

（壺A）擬凹線有段口縁壺。出土数は希少。内外面ヘラ磨き。

A1　口縁帯が短く、頸部から有段部屈曲点までが長めに外反して伸びる。A1aは口縁部がきちんとした段をなし、A1bは内面が段をなさない。

A2　外傾する有段部を垂下させる。

（壺B）無文有段口縁壺。摩滅しているものが多いが、調整が分かるものでは、口縁部はヘラ磨きまたは横ナデ、体部は外面ヘラ磨き内面ハケである。

B1　きちんとした段をなす口縁部をもつ。B1aは口縁部が直立、B1bは外反する。B2は口縁部内面が段をなさず、外面も小さな段のみのもの。

（壺C）長頸中型壺。頸部に刻みをつけた突帯を巡らせたり、口縁部を円形浮文やヘラ書き、擬凹線で加飾するものもある。

C1　直線的な長い頸部をもつ。口縁部は横ナデ、頸部内外面はハケ。C1aはきちんとした段をなす有段口縁。C1bは口縁部が直線的にやや外側上方に伸びる。口縁部に凹線状の横ナデを施すものもある。

C2　外反する頸部から外反する口縁部が伸びる。口縁部外面下端は突出気味になる。口縁部内面が段をなすものとなさないものがある。口縁部・頸部は内外面ヘラ磨きが基本。

（壺D）「く」の字状口縁壺。

D1　口縁が外反し、端部を外傾して面取りする。口縁部内外面ヘラ磨き。

D2　狭い頸部から口縁が外へ直線的に伸び、口縁端部を平らに仕上げる。最大径は体部中位まで下がる。外面と口縁部内面はヘラ磨き、体部内面は摩滅しており調整が分かりにくい。

（壺E）小型壺を一括する。E1～E3は扁平な体部のものが多く、体部に擬凹線を施す突帯を巡らすもの、赤彩を施すものが少なくない。調整は基本的に内外面ヘラ磨き。

E1　通常の壺形土器の口縁部をもつ。口縁部は無文。

E2　やや長い口縁部をもつ。口縁部は無文あるいは擬凹線を施す。

E3　長くて細い口縁部をもつ。口縁部下端に（擬）凹線を施す。

E4　体部がソロバン玉状になる台付壺。体部に突帯を巡らす。突帯部分に擬凹線や刻み目を施すものもある。

E5　短頸壺。

E6　無頸壺。把手が付くものもある。内外面ヘラ磨き。

（壺F）東海系広口壺。口縁部を擬凹線や棒状浮文で加飾する。内面ヘラ磨き、外面横ナデ。

高杯　杯部と脚部が接合するものが少ない為、別々に分類した。脚部には小円孔を穿つものがみられる。

（高杯杯部A）杯底部が水平で、口縁部が底部境で屈曲し、外反して伸びる。

A1　口縁部が底に対して短い。

A2　口縁部が底部に対して長く、底部との境に段をなす。

（高杯杯部B）杯底部が外側上方に伸び、口縁部が底部境で屈曲し、外反して立ち上がる。

（高杯杯部C）杯底部が碗形を呈し、口縁部が底部境で段を成し、外反して長く伸びる。

（高杯杯部D）極小さな杯底部から口縁部がやや内彎ぎみに開く。東海系ないしは畿内系の系譜。

（高杯杯部E）小型高杯。口縁部が直立して立ち上がる枡型の杯部をもつ。

（高杯脚部A）裾部が有段。

A1　大型品。三角の透かしが入る。中位上から外反して広がり、裾部は外面のみ段を成し擬凹線を施す。

A2　裾部が屈曲して広がり、外面のみ段を成す。

（高杯脚部B）直線的に広がる脚裾部。棒状脚に付く。

（高杯脚部C）緩やかに外反して広がるもの。脚部中程から外反するものと、杯部底から外反するものがある。

（高杯脚部D）裾部で屈曲して広がるもの。

D1　裾部の屈曲が弱い。

D2　裾部の屈曲が強く、脚部中位でやや膨らむ。畿内系の系譜。

（高杯脚部E）杯部底より「ハ」の字状に開くもの。

器台　受部と脚部が接合するものが無く、別々に分類する。脚部には小円孔を穿つものがみられる。

（器台受部A）擬凹線有段口縁。浅い受け部で、口縁部下端を突出させ、外反気味に短く屈曲する。

（器台受部B）無文有段口縁。円形浮文で口縁部を加飾する。

（器台脚部A）裾部で屈曲して広がり、端部はやや上方に屈曲して面取りする。

（器台脚部B）受部から脚部への孔が広く筒状になる。

（器台脚部C）受部と裾部がX状に交わるもの。

（器台脚部D）受部から脚部への孔が長い円柱状をなすもの。

（器台脚部E）緩やかに外反して広がるもの。

（器台脚部F）受部底より「ハ」の字状に大きく開くもの。受部から脚部への孔が小さい円柱状をなすものもある。

蓋　調整は基本的に内外面ヘラ磨き。

（蓋A）摘み頂部が窪む。体部は直線的に伸びる。

（蓋B）摘み頂部が平坦。体部が内彎して伸びるものが多い。

（蓋C）小型で、内面に垂下する返しが付く。

（蓋D）摘み部の径が大きく、先端部が外方向に張り出す。

鉢

（鉢A）有段口縁。直径が30cmを超える大型品もある。口縁部内外面が横ナデかヘラ磨き、体部内面がヘラ削りかヘラ磨き、外面がハケかヘラ磨き。

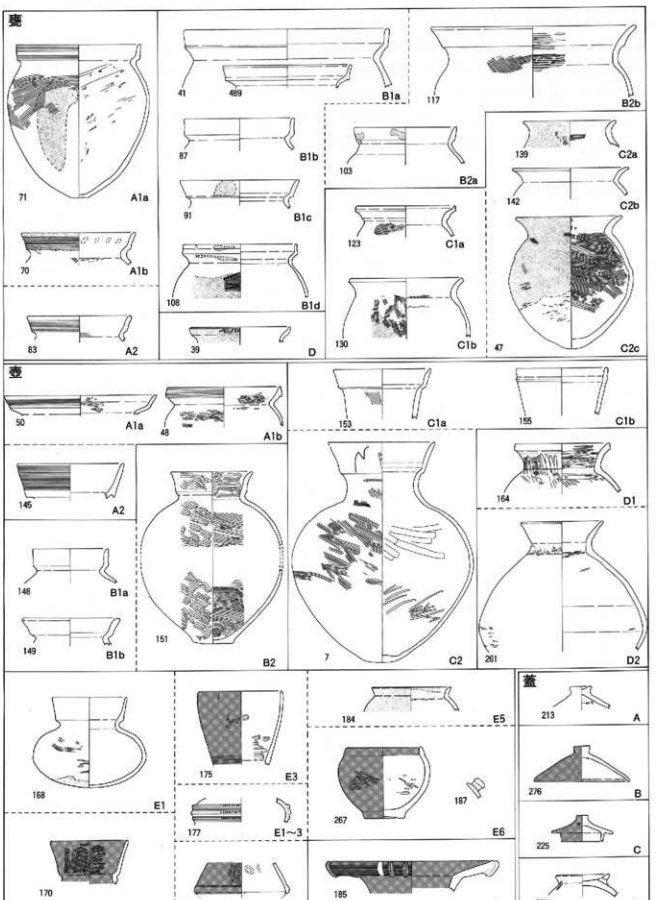
（鉢B）口縁部が、大きく外反して伸び、下端が2段に屈曲する。外面と口縁部内面はヘラ磨き、体部内面はヘラ削り。

（鉢C）内彎気味に開く体部に外反する口縁部がつくもの。口縁部横ナデ、体部外面ハケ。

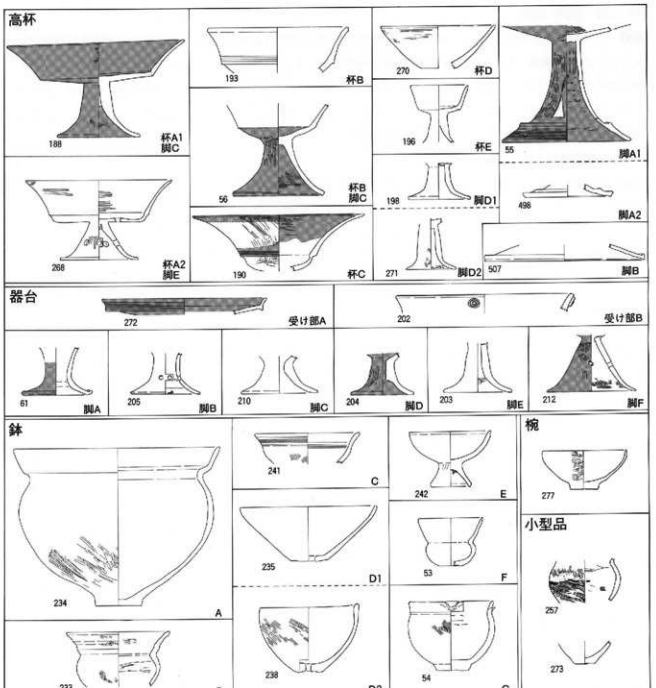
（鉢D）底部に孔を穿つ有孔鉢。

D1　体部が外に大きく開く。口縁端部をやや平坦にする。内面ヘラ磨き、外面ヘラ磨きあるいはハケ。

D2　体部が砲弾形を呈する。口縁端部を丸くおさめる。内面ヘラ磨き、外面ハケ。



第5図　弥生終末～古墳初頭・器種分類図(1/6、C2は1/8)



第6図　弥生終末～古墳初頭・器種分類図(1/6)

（鉢E）台付き鉢を一括する。脚が内彎気味に立つものと、「ハ」の字状に開くものがある。唯一、脚部と接合するものは内彎する椀状の体部のもので、内外面ヘラ磨きを施す。

（鉢F）小型坩。調整は、頸部・口縁部が内外面横ナデ、体部は内外面ナデか。

（鉢G）無頸壺ともとれるもの。注ぎ口を持つものもある。内面ナデ、外面ハケ。

椀　小さく厚い平底から体部が内彎して立ちあがる。内外面ヘラ磨き。

b．北部（第19・20図）

遺構　中央から東側を中心として、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物包含層は遺存せず出土量もあまり多くない。またCT43西側で実施した平成11年度本調査地区の層序を見ても、遺構検出面が古代の遺構と同一面になっており、殆ど時期が確定できない。削平の原因には、洪水等の自然災害や古代の集落が造営される際の整地の為などが考えられる。西側については、遺物包含層が部分的に残るが、遺構は明確でない。尚、平成11年度の本調査では、月影Ⅱ式期の土坑１基と高畠式期の竪穴住居跡が１棟確認されている。DT1には月影Ⅰ式の土器が出土した遺構（SX16）があるが、遺存状況が悪く遺構の形状は不明である。

遺物（第28図）　出土土器は、月影Ⅱ式が全域に少量ずつ出土する他、北部西側では月影Ⅰ式が、北部東側では高畠式が多い。実測図の44～47・54はCT43出土で、平成11年度に本調査した高畠式期の竪穴住居内の遺物である。

37～47は甕。37は甕A、38は甕B1a、39は甕Dで口縁部外面に連続した刺突を施す。42は甕C1b、43は甕C2a、45は甕C2b。46・47は甕C2c。調整は、44は小さな平底で、外面ハケ、内面ハケ後底部を除いてヘラ削り、46は外面ヘラ削り、内面は指頭圧痕を残し器面の凹凸が激しく、上半部は粗くハケもしくはヘラ削りする。47は丸底で外面ハケ後ヘラ削り、内面はハケ。煤は底部付近を除いた外面に付着する。40・41は大型の甕で、40は甕A1b、41は甕B1a。48～51は壺。48は壺A1b、50は壺A１a。49は壺C1bで口縁部を凹線状に横ナデする。51は壺E で、底部が尖り、外面全体を赤彩する。52は壺E4で、突帯部分に擬凹線を施す。53は鉢Fで扁平で小さな体部から長い口縁部が内彎気味に伸びる。54は鉢Gで、１箇所に注ぎ口が作られる。口縁部と体部の境に小さな段がつく。外面には煤が付着する。55～60は高杯。55は脚部A1で、三角形の透かしが３個所に連続して入る。56は杯Ｂ・脚部Ｃで、脚部は杯底部より外反して広がる。57は椀か椀状になる高杯杯部。58・59は脚部Ｃで、58は２孔１対になる小円孔が１対のみ遺存している。60は大型品の脚部。61は器台脚部Ａ。62は椀。63～66は底部。

c．中央部（第20・21図）

遺構　最も多くの遺構を検出したエリア。竪穴住居約６棟、溝、土坑、ピットがある。竪穴住居が確認されたのは、AT36・37・38、BT66、平成９年度調査CT3･6である。規模等詳細は分からないが、平面形は円形・隅丸四角形の２種があるものと考えられる。その他、柱穴が多く検出されており、複数の掘立柱建物が建っていたものと推測される。AT35～AT41の東側には幅７～12ｍの大溝が検出されたが繋がりは不明確である。AT36には、幅550㎝、深さ65㎝以上の曲線的に巡る周溝状の遺構が検出されており、周溝内部には竪穴住居と推測される土坑や、直線上に並ぶ柱列が検出された。柱列の柱間隔は30～40㎝と狭い。南側のAT35西側に検出した掘り込みと繋がるとすれば、周溝内部の規模は直径約15ｍを測る。尚、AT35南方では平成９年度の本調査で月影Ⅱ式～白江式期の竪穴住居１棟と古府クルビ式期の大溝が発掘されている。

遺物（第29～34図）　最も多くの遺物が出土したエリア。出土土器は月影Ⅰ式から白江式までのものがあり、特に多いのが月影Ⅱ式である。

67～144は甕。67～82は甕A1で、口縁部が直立するもの（甕A1a）と外反するもの（甕A1b）があり、後者のうち69・70・73には口縁部内面に指頭圧痕が残る。83・84・112は甕A2で、112は大型品。85～100・113～115は甕B1bまたは甕B1cで、113～115は大型品。101～103は甕B2a。甕B1bの92・100と甕B2aの101は体部が球胴状になるやや小型の甕で、煤が外面全体に付着する。104～111は甕B1d。116～118は甕B2bの大型品。119～124・133は甕C1a。125～132・134～137・143は甕C1bで、125は口縁端部に擬凹線を施すもの、143は大型品。138～140・144は甕C2aで、144は大型品。141・142は甕C2b。145～187は壺。145は壺A2で、長頸壺の可能性もある。146～148は壺B1a、149は壺B1b。150・151は壺B2で、やや縦長の球に近い胴部をもつ。151はやや小型で底は丸底に近いもので自立しない。152は平底。152～154は壺C1aで、154は口縁部外面下端を垂下させる。155は壺C1bで口縁部外面下端が僅かに段を成す。156・161は頸部

と胴部の境目に刻み目を入れた突帯を巡らす。157～160・162・163は壺C2である。口縁部を加飾するものが多く、159は2重の弧を描いたヘラ書きを4ヶ所に描き、160は下端に擬凹線、162は円形浮文を貼り付け、163は下端に刻み目を入れる。164～167は壺D1で、165は口縁端部に擬凹線文を巡らす。168は壺E1で偏平な体部で丸底になる。169～174は壺E2で、171～174は口縁部全体または口縁部下端に擬凹線を巡らす。175・176は壺E3で、頸部に擬凹線を巡らす。177～180は壺E胴部で、擬凹線を施す突帯を巡らせ、177は更に刻み目を施す。178・179は外面を赤彩する。181は壺E4で外面にヘラ状工具で直線文と綾杉文を交互に施す加飾をする。八尾町翠尾Ⅰ遺跡平成8年度本調査の出土例がある。182～184は壺E5で、184は煤が外面全面と口縁部内面に回り込んで付着する。185・186は壺Fで、185は口縁部が長く直線的に外に伸びる。断面三角形の口縁帯の外面に擬凹線を施し、3本一組の棒状浮文を貼り付けて加飾する。内外面を赤彩する。186には棒状浮文が剝がれた跡が2箇所に残る。187は壺E6で、縦に貫通する孔の開いた把手部分。188～201は高杯。188は杯部A1・脚部C、189は杯部A1。190～192は杯部Cで、椀形になる底部は小さく、190・191は口縁部下端に擬凹線を施す。193は杯部Bで口縁部下端に擬凹線を施す。194～196は杯部Eで、194は体部に環状の把手が付く鉢とも分類されるもの。197は杯Cあるいは椀状になる杯部。198は脚部D。199・200は脚部Cで、199は5箇所に小円孔を穿つ。201は脚部E。202～212は器台。202は受け部B。203・209・211は脚部Eで、209は2孔1対になる小円孔を2箇所に穿つ。204は脚部D。205・206は脚部Bで、205は2孔1対になる小円孔を2箇所に穿つ。207・208・210は脚部C。212は脚部Fで、受け部から脚部に至る孔が小さい円柱状をなし、脚部中位に小円孔を4箇所穿つ。213～227は蓋。213～218は蓋A。219～224は蓋Bで、つまみ部が小さく柱状になるもの（219・221・223・224）とやや大きめで厚みの無いもの（220・222）とがある。219はつまみ頂部端を刻む。225・226は蓋C。227は蓋Dで、摘まみ部に2箇所向かい合わせに孔を穿つ。228～247は鉢。228～232・234は鉢Aで、229・231は丸底。230は口縁部に擬凹線を施す。234は大型品で平底となる。233は鉢B。235～240は鉢Dで、235・236は鉢D1、237・238は鉢D2である。241は鉢C。242は鉢Eで、内彎する椀状体部をもち脚部が内彎気味に立つ。243～247は鉢Eなどの脚部で、脚部が内彎気味に立つもの（243・244）と「ハ」の字状に開くもの（245～247）がある。245は脚部中位に小円孔を4ヶ所に穿つ。246は外面及び脚部内面をヘラ磨きして赤彩を施す。247は高杯か器台の脚部の可能性もある。248～250は壺の底部。251は壺の口縁部と考えられるもので、連弧文を巡らす。

d．南部

遺構（第21図） 溝、土坑、ピットがある。

遺物（第35図） 出土土器は月影Ⅱ式から白江式までの時期のものであり、中でも主体をなすのは白江式である。

252～259は甕。252は甕B1bで、やや小型で体部が球胴状になり、煤が外面全体に付着する。253～256は甕B1c。257は小型甕で、体部外面は肩部より下に煤が付着する。258は甕C1、259は甕C2。260～267は壺。260は壺C2で口縁部内面は段をなさず、外面下端に突出部を巡らすことで段にする。261は壺D2で、撫で肩で最大径が体部中位にくる。262は壺E1で外傾する口縁部外面に小さな段がつく。263・264は壺E5で263は「く」の字状の口縁部をもち、264は直立する有段口縁で肩が大きく張り出す。265は擬凹線を施す突帯を巡らす壺E体部。266は壺E4で体部に突帯を巡らす。突帯下の器壁の厚さは0.1cm強と非常に薄い。267は壺E6で、厚手の平底から体部が内彎して立ち上がる。短い口縁部の外面には小さな段がつく。268～271は高杯。268は高杯杯部A2・脚部Eで2孔1対となる円形の透かし穴を3ヶ所に穿つ。269は杯部A1、270は杯部D、271は脚部D2、272は器台受け部A。273は小型品で、器壁は摩滅しており調整は不明確。274～276は壺で、274は口縁部が外反し、端部に面をとる。275・276は蓋Bで体部が内彎し、276は口縁端部に煤が付着する。277は椀で、小さく厚い平底から体部が内彎して立ち上がる。内面の所々に炭化物が付着している。

e．小結―南部Ⅰ遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭

この時期の遺構・遺物は、遺跡範囲のほぼ全域に広がるが、なかでも中央部での密度が突出する。出土土器は、月影Ⅰ式から高畠式までの時期のものがある。中心となるのは月影Ⅱ式で、前後の時期の遺物も多い。

時期別に土器の出土状況をまとめると、まず月影Ⅰ式の土器は遺跡中央部から北側を中心に見られる。特に北部西側ではこの時期の土器の占める割合が多く、平成10年度調査CT12付近とDT1･2付近で集中する。当期に帰属すると考えられる土器は、装飾性が残る大型高杯（脚部A1）や有段の脚裾部（脚部A2）、棒状脚裾部（脚部B）、近江系受け口状甕（D）、甕（B1a）、壺（A1a・b）などで、法仏式的な様相が残る。月影Ⅱ式の土器は遺跡全体で見られる。特に多量に見られるのは中央部であり、この時期に土器廃棄量が激増する。その原因としては、人口の増加や、祭祀など土器をあまり使用せずに廃棄する行為を多く行ったなどが推測される。後者については土器の使用痕観察などにより真偽が推測できるのかもしれないが、破片が多いことや筆者の力量不足で判断できない。白江式の土器は遺跡中央部から南側に見られるが、特に南部ではこの時期の土器が占める割合が多い。当期に帰属すると考えられる土器は、東海系もしくは畿内系の高杯（杯部D）、畿内系の高杯脚部（脚部D2）、杯部底からハの字形に開く脚部（高杯脚部E・器台脚部F）、最大径が体部中位まで下がった壺（D2）他である。古府クルビ式の土器は、北部南端で出土した小型坩形土器（鉢F）などが該当すると考えられる他、平成９年度本調査では大溝から当期の土器が出土した。当期には遺物出土量が激減し、中央部を中心に極少量見受けられるのみである。高畠式の土器は遺跡北部東側に位置するCT43西側の竪穴住居内より出土した。土器は最大径が体部中位近くに下がる甕（C2c）他がある。

土器に見られる特徴は、遺跡存続期間を通して一貫して外来系土器の影響が弱いという点である。弥生時代終末期において外来系土器の影響が見受けられるものは、近江系受け口状甕、東海系広口壺、東海系もしくは畿内系の高杯など数点のみで、前二者はかなり在地化したものである。古墳時代初期については、これまで多くの研究者の調査・研究によって布留系甕の定着度が遺跡間で違うことが指摘されているが、南部Ⅰ遺跡に関して言えば定着しなかった部類に入る。

南部Ⅰ遺跡集落の首長クラスの墓地を推測すると、まず地理的に最も近いのが富崎千里古墳群である。この古墳群は未発掘であることから時期などの詳細は分からない。平成12年度に試掘調査を予定しており、その結果に期待する。また、３世紀末に造られた前方後方墳である勅使塚古墳も、集落の最盛期とは外れるが集落存続期間に造られるものとして挙げられる。

尚、南に隣接する八尾町翠尾Ⅰ遺跡にも法仏式期から白江式期にいたるまでの遺構・遺物が見られる。この遺跡の最盛期は、月影Ⅱ式（漆町４群併行期）から白江古墳（漆町５群併行期）と推察されており、南部Ⅰ遺跡の最盛期とほぼ時期を同じくする。南部Ⅰ遺跡と接する場所は未調査であるが、現在までの調査では当期の遺構が確認されている場所は遺跡南部に限られている。

② 古代 遺構・遺物の記述は、北部、中央部、南部に三分して行う。遺物のうちいくつかの形態に分かれる器種については、次に記述する器種分類を基に簡潔に行いたい。

a．器種分類（第７図）

須恵器 出土した器種は、杯蓋、杯、長頸壺、短頸壺、甕、横瓶、双耳瓶、高杯、鉢がある。

（杯蓋） 口縁部の形態から、かえりが付くものを杯蓋A、断面三角形を呈するものを杯蓋B、丸く巻き込むものを杯蓋Cとする。

（杯） 高台がつくものを杯A、つかないものを杯Bとする。更に、体部が外側上方に立ち上がるものをA１･B1とする。これには底部と体部の境が丸いものと角張るものがある。また、器高が高いものをA2･B2、体部が大きく外傾するものをA３・B３とする。

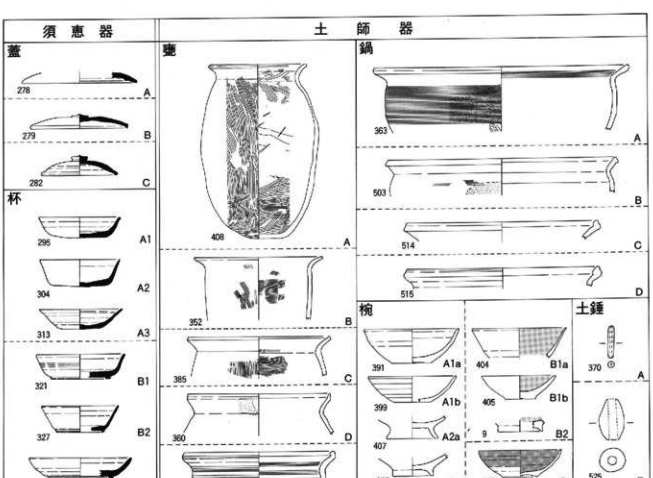
土師器　出土した器種は、甕、鍋、椀がある。

（甕）　甕Aは大きく外反する口縁部の端部を丸くおさめ、体部上半部にやや膨らみをもち、底部が平底になるもので、甕Bは外反する口縁端部を丸くおさめ、体部が直線的に立ち上がるものとする。甕Cは口縁端部を面取りするもので、口縁部が断面四角形を呈するものと、口縁部がやや内彎し端部を外傾気味に面取りするものがある。甕Dは、口縁端部を短く内側に屈曲させるもの。甕Eは、口縁端部を内側に巻き込むもので、内面が段をなすものとなさないものがある。調整が分かるものでは、甕Aが内外面ハケメ後内面ヘラ削り、甕Bが内外面ハケメ、甕Cが内外面ハケメまたは内外面カキメまたは内面カキメ・外面体部上方カキメでその下をヘラ削りするものなどがある。甕Eは内外面カキメ調整となる。

（鍋）　口縁部の形態から、端部を丸くおさめるものを鍋A、端部を面取りし断面四角形を呈するものを鍋B、内側に屈曲させるものを鍋C、内側に巻き込むものを鍋Dとする。調整が分かるものでは、鍋Aが口縁部内面及び外面をカキメ調整する。

（椀）椀は底部に回転糸切り痕を残す。椀Aは黒色処理や赤彩などしないもの。A1は高台がつかず、A1aは器壁が厚く体部が内彎して立ち上がり口縁部境で緩く屈曲するもので、A1bは器壁が薄めで体部がやや内彎気味に外側上方に開く。A2は高台がつくもので、高台の形態で細分した。椀Bは内黒土器。B1は高台がつかないもので、器形で細分した。B2は高台がつくもの。椀Cは赤彩土器で、内外面に赤彩を施す。

（土錘）小型で細長い管状呈するものをA、中央部が膨らみをもつ筒状のものをBとした。



第7図　古代・器種分類図(1/6)

b．北部（第19・20図）

遺構 竪穴住居６棟、溝、土坑、ピットを検出した。竪穴住居は、AT50、DT1、平成10年度調査CT25・27・34・47で検出した。住居の規模は、確認できる限りでは一辺３～５ｍを測る。その他、柱穴を多く検出しており、掘立柱建物が複数建つものと考える。尚、平成10年度調査CT40～43付近には、平成11年度本調査で８世紀中葉から９世紀後葉の掘立柱建物１棟、竪穴住居３棟、鍛冶遺構１箇所、畠跡などを検出している。

遺物（第36・37図） 278～351は須恵器。278～293は杯蓋。278は杯蓋A、279～281は杯蓋B、282～290は杯蓋C。294～337は杯。294～313は杯Aで、294～303・305～309は杯A１、304は杯A２、312・313は杯A３である。314～334は杯Bで、314・315・317～325は杯B１、326～328は杯B２、316は杯B３である。336は杯A２か杯B２、337は杯A３か杯B３。338は鉢。339は直口壺。340・341は横瓶。342～344は甕で、342は頸部で外面には沈線間に２条の波状文を巡らす。345～347は長頸壺。248～350は小型壺。351は高杯脚部。352～369は土師器。352～362は甕。352は甕Bで内面に横方向、外面に縦方向のハケメ。353・355・357・358は甕Cで、口縁部が断面四角形を呈するもの（353・355）と口縁部がやや内彎し端部を外傾気味に面取りするものがある（356～358）。355は口縁部内面に横方向のカキメ。357・358は口縁部内面に横方向のカキメ、外面は頸部から体部上方は横方向のカキメでその下を縦方向にヘラ削りする。354は小型甕で内外面は底部を除いて煤がかかる。359・360は甕D。361・362は甕Eで、361は内外面横方向のカキメ。363～366は鍋。363は鍋Aで口縁部内面と体部外面に横方向のカキメ。364・365は鍋D。366は把手部分。367～369は椀。367は椀A2、368・369は椀A１。370～372は土錘Aで、370は長さ5.2cm幅１cm穴径0.2cm、371は長さ４cm幅1.1cm穴径0.2cm、372は残存する長さ4.5cm幅1.4cm穴径0.3cm。373～375は轆羽口で端部がガラス化している。

c．中央部（第20・21図）

遺構 竪穴住居１棟、溝、土坑、ピットを検出した。竪穴住居はAT41で検出した。一辺6.5ｍを測るやや大きめの住居で、覆土より須恵器、轆羽口などが出土した。その他、柱穴を多く検出しており、掘立柱建物が複数建つものと考える。

遺物（第38図） 376～384は須恵器。376～382は杯。377・378は杯A１、380は杯B１、381は杯B２。383・384は杯蓋で、383は杯蓋C、384は杯蓋B。385～391は土師器。385～387は甕C類で、385・386は内面に横方向、外面に縦方向のハケメ。388は円筒形の土器。平底で底部と体部の境をヘラで横方向に撫で付ける。389～391は椀A1aで、390は体部の立ち上がりが強い。392は土錘Aで、長さ4.6cm幅1.3cm穴径0.2cmを測る。393は轆羽口で端部がガラス化する。

d．南部（第21図）

遺構 溝、土坑、ピットを検出した。AT26では柱穴が直線的に並び、掘立柱建物が建っていたものと考えられる。柱の間隔は2.2～2.6ｍを測る。その他にも、柱穴が多く検出されており、複数の建物があったと考える。

遺物（第38図） 394～398は須恵器。394・395は杯。394は小型品で、底部は回転糸切り痕を残す。395は杯B１。396は小型壺。397・398は双耳瓶で、397は３条の沈線を巡らせ、398は突帯を巡らす。399～411は土師器。399～407は椀。399～403は椀A1b。404・405は内黒椀で、404はB1aで器壁が薄く体部が直線的に外傾する。405はB1bで小型で器壁が厚く短めの体部がやや内彎気味に開く。体部の長さが揃っておらず、形がやや歪む。406・407は椀A2で、406はやや外反して広がる長めの高台で端部を丸め、407は「ハ」の字状に広がる長い高台で接地面を平らに仕上げる。408～411は甕、408・409は甕Aで、408は外面に縦方向のハケメ、内面は横方向のハケ後頸部から体部中位やや下までを斜め方向にヘラ削りし、409は外面に縦方向のハケメ。410・411は甕E。408・409は６世紀末～７世紀初頭で、それ以外は９世紀中葉～10世紀初頭。

e．小結―南部Ⅰ遺跡の古代

調査では6世紀末～7世紀中葉、8世紀中葉～10世紀初頭の遺構・遺物を確認した。古代の遺構・遺物は遺跡範囲全域に広がっているが、最も集中するのは北部である。

地区別の遺構・遺物の状況をまとめると、まず北部の遺物の年代は8世紀中葉から10世紀初頭である。平成11年度の本調査では8世紀中葉から9世紀後葉の竪穴住居、掘立柱建物、鍛冶関連の遺構などが検出されている。試掘調査でも竪穴住居や柱穴などの遺構が確認され、鞴羽口や鉄滓が出土したことから、同様の遺構が広がっているものと考える。また、調査区北側に接する高日附地区にも同時期の遺物が多く採集される（第Ⅱ章第2節第3項(3)参照）ことから、北方に古代遺構集中地域が広がることは確実である。次に、中央部の遺物の年代は8世紀中葉～後葉である。遺構・遺物は北半部のBT65・AT41付近に最も集中し、北側の集中地域に繋がる。最後に、南部の遺物の年代は6世紀末～7世紀中葉、9世紀中葉～10世紀初頭の2時期に分かれる。6世紀末～7世紀初頭の土器は南西のBT37・38付近から出土した。またBT25～30の西方は平成3年度の試掘調査により小倉雉水河原遺跡として周知されており、河川跡から6世紀末～7世紀中葉の土師器が出土している。9世紀中葉～10世紀初頭の遺構・遺物は、北西側で密度が高い。尚、南部地区中央部に流れる古代の河道は、方向から見て上流で峠川に繋がると考えられる為、古代の峠川の流路であった可能性が高い。

以上から、古代における集落の推移は、

①6世紀末に南部地区において小規模な集落が出現。7世紀中葉まで存続

②8世紀中葉に北部から中央部に大規模な集落が形成され始める

③9世紀中葉には北部と南部に集中地区が分かれ、10世紀初頭に廃絶

と推測する。ただし、これはあくまで試掘調査での限られた材料による推測である為、今後微妙に変化する可能性もあろう。尚、南に隣接する八尾町翠尾Ⅰ遺跡では8～9世紀の遺構・遺物が確認されているが、南部Ⅰ遺跡と接する地域は未調査である為、繋がりは分からない。翠尾Ⅰ遺跡周辺は古代から中世にかけて田中保という公領に取り込まれており、南部Ⅰ遺跡もこれと関係する可能性がある。

土器組成については、8世紀中葉から集落が造営された北部・中央部は、9世紀中葉になってから再形成される南部と比較すると、須恵器の占める割合がかなり高い。特に食膳具は、北部・中央部では須恵器杯が、南部では土師器椀の占める割合が圧倒的に多くなる。

③　中世　南北2箇所にまとまりが見られる。以下、北部、南部に分けて記述する。

a．北部（第19・20図）

遺構　溝、土坑、ピット、石組み井戸1基を検出した。石組み井戸はBT79で検出した。尚、平成10年度調査CT40～45付近には、平成11年度本調査で室町時代の掘立柱建物2棟、石組み井戸1基、区画溝を検出している。

遺物（第39図）　412～416は中世土師器。全て非ロクロ成形。412は器壁が厚く、口縁部を2段ナデする。体部はやや内彎気味に外傾する。413は口縁端部に狭い一段ナデを施し、先細りさせる。体部は外傾し、底部は丸底と考えられる。口縁部下端には連続する指頭圧痕が残る。414は体部が緩やかに内彎し、底部が丸底気味になる。口縁端部にタールが付着する。415は平底から外傾する体部がつく。416はコースター状の器形で、平底から短い口縁部を直立させる。412は12世紀後半、414・415は14～15世紀、416は15世紀、413は15世紀末。417・418は青磁碗で、417は外面に蓮弁文を施す。釉は青灰色。418は口縁部下端外面に3条の沈線を引くもので、断面に漆が付着する。釉は緑味を帯びた青灰色。419～427は珠洲。419～425は擂鉢。419・420は体部が内彎気味に立ち上がり、器壁が薄い。419は口縁部が内彎し端部はほぼ水平な面をとる。420は口縁端部が外傾し内側に尖らせる。一単位1.7㎝当たり9目の細かい櫛歯原体で卸目を施入する。421は体部が内彎気味に開き、口縁端部が外傾する。一単位2.7㎝当たり18目の細かい櫛歯原体で

卸目を施入する。422は端部がやや拡張気味の方頭を呈する外傾口縁で、体部がほぼ直線的に開く。卸目は細かめの櫛歯原体で浅く入れる。423・424は口縁端部を外側に拡張させて水平に面をとる。423の卸目は太く粗い櫛歯原体で深く施入する。425は卸目が無く、器面は磨耗する。419・はⅠ期、420はⅠ～Ⅱ期、421はⅡ期、422はⅢ期、423・424はⅣ期。426・427は甕。叩き目は粗くて浅く、426は底部境まで、427は底部から4㎝以上の間を開けて叩打する。428は瀬戸美濃の折縁中皿で、断面に漆が付着する。外底面・体部下端以外に灰釉を施す。429は瓦器の火鉢で、体部は内彎し、口縁端部を水平に面をとる。肩部には孔を穿つ。内面には指頭圧痕を残す。430は土師質土器で口縁端部内面に煤が付着する。431は上臼で、高さ10㎝、上縁のくぼみは4.5㎝を測る。ふくみは殆ど無く摺り面は平坦で、目はかなり磨り減っている。供給口は四角形で入り口が広い。上端のくぼみ中央部が黒色化しており、火を受けたのであろうか。432～438は越中瀬戸。432・434は丸皿。432は内外面に灰釉をかけ、434は削り出し高台で、底部内外面以外に鉄釉をかけ、内面にはさらに灰釉をかける。433は杯で、底部に回転糸切り痕を残し、底部外面を除いて鉄釉がかかる。435・436は擂鉢で、内外面に錆釉をかける。435は口縁端部が外傾し内側に尖らせる。436は削り出し高台。437は丸碗で、内外面に鉄釉をかける。438は匣鉢で、内外面に錆釉をかける。439・440は伊万里で、439は碗、440は紅皿。

b．南部

遺構（第21図） 溝、土坑、ピット、石組み井戸3基を検出した。遺構・遺物はBT37～40で特に集中する。石組み井戸はAT23、BT38・40で検出した。BT40には平面四角形を呈する土坑が3基あり、周辺から鉄製品が出土している。土坑の規模は、確認できる部分で幅2.5～3.3mを測る。

遺物（第39・40図） 441～456は中世土師器。441はロクロ成形で、それ以外は非ロクロ成形。441は体部中程で外反させ、口縁を上方に摘まみ上げる。底部に回転糸切り痕がある。442・444は丸底で体部が内彎する。口縁部にはタールが付着し、444は一箇所を抉る。443・447・448は底部がやや平たく、短い口縁部が緩やかに内彎して立ち上がる。446・445は平底から体部が外傾して立ち上がる。449・450・452・453は丸底で、体部が緩やかに内彎する。口縁部は先細りする。452は内面にタールが付着、453は口縁部下端外面に指頭圧痕が残る。451・454～456は平底で、体部が外反する。先細りする口縁部下端外面に指頭圧痕が残る。455は口縁端部にタールが付着する。442～444・447・448は14世紀、441・445・446は15世紀、449～456は15世紀末～16世紀前半。457・460は珠洲。457は甕で断面に漆が付着する。460は擂鉢で口縁端部をやや外側に拡張し、水平に面をとる。体部は直線的に広がる。外面の一部に煤が付着しており、火を受けたと見られる。Ⅳ期。458は用途不明の鉄製品で、平たく細長い形状。幅1.9㎝で、一方は厚さ1㎝で断面が長方形を呈し、もう一方は錆膨れで厚さ2㎝の楕円形になる。459は素焼きの土鈴で、上方を突出させて径0.5㎝の穴を穿ち、下方には縦に切り込みが入る。胎土は緻密で砂粒を殆ど含まない。461は八尾の甕で口縁部が「N」状になる。462は青磁碗で、輪高台。釉はくすんだ青灰色で、高台裏は施釉しない。463～465は越中瀬戸の丸皿で、削り出し高台。463は鉄釉、464・465は灰釉で、底部内外面以外を施釉する。465は見込みに十六弁菊の印花文を押印する。466・467は伊万里の染付け皿。466は蛇の目凹形高台で、内面に草花文外面に唐草文を描く。467は断面三角形の高台で、見込みと高台端部に砂が付着する。その他、熊野社境内には五輪塔（空風輪・火輪・地輪）や板碑といった中世の石造物があった。

C．小結―南部Ⅰ遺跡の中世

調査では12世紀後半から16世紀前半の遺構・遺物を確認した。遺構・遺物のまとまりは北部と南部に分かれ、中央部は空白地となる。

北部の遺物の年代は12世紀後半から16世紀前半である。平成11年度の本調査では、この場所に室町時代の掘立柱建物2棟、石組み井戸1基、区画溝を検出している。また、北側に隣接する高日附地区には14世紀、15世紀末～16世紀前半の遺物が採集されており、中世の遺構が北方へと伸びる可能性が高い。

南部の遺物の年代は14世紀から16世紀前半である。遺構・遺物は南端の狭い範囲で最も密度が高くなる。尚、南に隣接する翠尾Ⅰ遺跡（八尾町）では12世紀後半から15世紀の遺構・遺物が確認されているが、南部Ⅰ遺跡と接する地域は未調査であり、同一の集落としてまとめられるかどうかは今後の調査を待ちたい。

中世には、この南北に長く伸びる微高地上にいくつかの集落が存在していたと考えられる。

④ 平成10年度調査Dトレンチ

a．概況と層序 用水路敷設工事に先立ち、工事施工範囲を発掘調査し記録保存を行った。調査対象地は、遺跡中央部北側に位置する。調査区は、幅２ｍのトレンチ２箇所で、調査面積は約100㎡である。基本層序は、１層：暗オリーブ褐色土（耕作土）、２層：オリーブ黒色シルト炭粒混（盛土）、３層：暗灰黄色粘質シルト＋オリーブ褐色砂質シルト（古代遺物包含層）、４層：黄褐色砂質シルト（地山）となる。

b．遺構（第８・９図） DT1の弥生時代の不明遺構（SX16）、DT2の古代の竪穴住居１棟（SI17）の他、古代の柱穴、中世以降の柱穴・旧河道を検出した。SX16は、平面形がよく分からないが、南北2.8ｍ・深さ15㎝の浅い掘り込みの中に弥生土器が層状にかたまって出土する。SI17は、南北４ｍ、深さ40㎝を測り、内部に南北54㎝・深さ22㎝の土坑がある。遺物は床面より少し上層に多く出土した。

c．遺物（第41図） 弥生時代の土器、古代の須恵器・土師器、中世の珠洲・白磁、近世の伊万里が出土した。以下、遺構毎に記述する。

SX16：487～493は弥生土器の甕。487は甕B1b、489・490は甕B1a、491は甕B2aで肩部上方に刻み目を入れる。492・493は底部である。

SK19：494は須恵器で、杯A2aである。

SI17：495～498は弥生土器。495は甕B1a、496は壺C1b、497は壺D1、498は高杯脚部A2である。499は須恵器で杯蓋C。500～503は土師器。500は甕D、501は甕C、502は小型の甕である。503は鍋B。

その他：504～508は弥生土器。504～506は甕で、505は甕B1b、506は甕B1a。507は高杯脚部B。508は壺。509～512は須恵器。509は双耳瓶の頸部。510～512は杯で、512は坏B2a。513は白磁碗で、口縁端部を玉縁状にする。

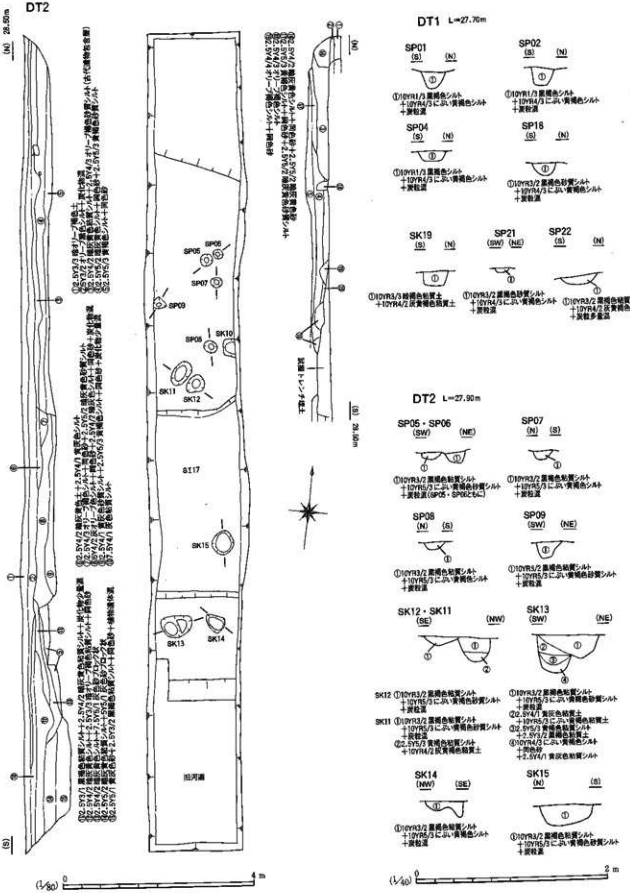
d．小結 SX16は弥生時代（月影Ⅰ式期）に帰属する。Dトレンチ出土の弥生土器には法仏式的な様相を残こすのも多く、周辺には月影Ⅰ式のうちでも古い段階に人が暮らしていたと推定する。SI17は古代の竪穴住居で、８世紀中葉～後葉に帰属するものと考える。

(3) 参考 ～南部Ⅰ遺跡・高日附地区採集遺物～（第42図）

高日附地区は、南部Ⅰ遺跡の北側に位置し、南部Ⅰ遺跡・上吉川Ⅰ遺跡の試掘調査対象地に挟まれた地域である。この地域は、平成９年度分布調査前から高日附遺跡として周知されており、現在までに多くの遺物が採集されている。今回図示したものは、地元の方が採集されたものと分布調査で採集したものがある。

採集遺物は、古代の須恵器・土師器・土錘、中世の中世土師器・珠洲・青白磁、近世の越中瀬戸などがある。542～559は須恵器で、542～548は杯で、542・544は杯A3、543は杯A1、546は杯B1である。549～554は杯蓋Cで、554の外面には重ね焼きした際の粘土が付着する。555は壺で、肩部に沈線を１条巡らす。556～559は体部破片。561は土師器甕で、図示し得なかったが体部中央部に把手が付く。562は土師器椀で、器壁が薄めで、外傾する体部から口縁部が緩く屈曲して立つ。内面と外面上半部を赤彩する。560は土錘Bで外面に撫って整形したような凹みがある。563～566は中世土師器で、全て非ロクロ成形。563は丸底で器壁が厚く体部が内彎する。内面は木口ハケで一方向に施でたあと体部を横ナデする。564～566は平底で体部が外反する。567～570は珠洲。567・569は甕で、567はⅣ期に比定される。568は片口鉢の片口部分。570は叩き目がある体部破片が底部外面に溶着するもの。571は青白磁の瘤頬で、外面に櫛状具による唐草文を施す。外面のみに透明感のある水色の釉をかける。

DT1
L=28.20m
W
E
SD24
SP18
SP19
SP20
SP21
SP22
SP23
SP01
SP02
SP03
SP04
SX16
サブトレ
トレンチ3
トレンチ4
トレンチ5
トレンチ6
トレンチ7
トレンチ8
トレンチ9
トレンチ10
トレンチ11
トレンチ12
トレンチ13
トレンチ14
トレンチ15
トレンチ16
トレンチ17
トレンチ18
トレンチ19
トレンチ20
トレンチ21
トレンチ22
トレンチ23
トレンチ24
トレンチ25
トレンチ26
トレンチ27
トレンチ28
トレンチ29
トレンチ30
トレンチ31
トレンチ32
トレンチ33
トレンチ34
トレンチ35
トレンチ36
トレンチ37
トレンチ38
トレンチ39
トレンチ40
トレンチ41
トレンチ42



第9図　南部Ⅰ遺跡・Dトレンチ平断面図

遺物は、主に古代（8世紀中葉～9世紀後葉）と中世（14世紀、15世紀末～16世紀前半）に帰属するものである。北に接する上吉川Ⅰ遺跡や南に接する南部Ⅰ遺跡の試掘調査からも、この地域に遺構が伸びていることは確実である。

第4項　南部Ⅱ遺跡（第23図）

(1) **概況と層序**　峠川左岸に位置する。南方には小倉中稲遺跡・小倉中稲Ⅱ遺跡、東方には南部Ⅰ遺跡がある。調査の結果、調査区中央部の狭い範囲で遺構・遺物を確認した。その範囲での基本層序は、1層：黒褐色土（耕作土）、2層：床土・盛土、3層：黄褐色シルト＋灰黄色細砂・炭粒混（中世後半遺物包含層）、4層：暗灰黄色シルト＋灰黄色細砂、5層：暗灰黄色シルト＋暗灰黄色砂（中世後半遺構面・中世前半遺物包含層）、6層：黄褐色砂（地山・中世前半遺構面）である。

(2) **遺構**　中世の掘立柱建物、土坑、溝、ピット、集石遺構を検出した。T46には根石を施した柱穴が直線上に並んでおり、掘立柱建物が建っていたものと考える。同じトレンチの西端には集石遺構があり、5～20㎝の石が不整形に集められている。ここから珠洲、中世土師器、青磁など多くの遺物が出土したが、土器には2時期のものが含まれている為、上層の砂混じりの掘り込みが新しい時期の遺構で、集石遺構がそれに切られていると推測する。

(3) **遺物（第40図）**　中世土師器、珠洲、青磁、瀬戸美濃などが出土した。468～478は中世土師器。468～476は非ロクロ成形。468は口縁部を一段ナデして体部を外傾させ、端部は丸くおさめる。469は器高が低く、口縁部を一段ナデして端部を面取りし、体部を緩やかに立ち上げる。口縁端部にタールが付着する。470はコースター状の器形で、短い口縁部を内側に折り返す。471・472はやや丸底気味で、体部は内彎し、口縁部を丸くおさめる。473～476は口縁を強く一段ナデし、端部を面取りする。体部はやや直線的に立ち上がる。473は体部内面にハケメと指頭圧痕が残る。477・478はロクロ成形で、体部が内彎し、口縁部はやや屈曲して立ち端部を丸くおさめる。底部は回転糸切り。468・469・473～478は12世紀後半～13世紀前半、470～472は15世紀。479～482は青磁。480は皿。体部が中程で屈曲する。見込みにヘラによる片切彫り及び櫛書文を施す。釉はオリーブ色で、底部外面を剝ぎ取る。同安窯系。479・481・482は碗。479は内面に片切彫りを施す。釉は黄味を帯びたオリーブ色。481は外面にやや細身の鎬蓮弁文を施す。釉は緑味を帯びた青灰色。482は内面に片切彫りで草花文を描く。釉は青灰色。483は瀬戸美濃の灰反皿で、灰釉を施す。484～486は珠洲。484は壺。肩の張り出しが極めて強く、焼成はあまく軟質。叩き目は粗大で、頸基部から一段下がった位置から叩打する。Ⅵ期。485は甕で、体部下端部分の破片。叩き目はやや細かい。486は鉢。内面に炭化物が付着する。

(4) **小結**　調査では、中世（12世紀後半～13世紀前半、15世紀）の遺構・遺物を確認した。遺構検出面は1～2面である。遺構遺存範囲は非常に狭いが、後世の改変の影響を強く受けており、本来はもっと広範囲に広がっていた可能性がある。

当調査区は、試掘調査前には南部Ⅰ遺跡の範囲に含めていたが、調査結果より峠川を境として南部Ⅰ遺跡とは分断される別の微高地上に立地していることから、別の遺跡として区別した。当遺跡の上方には、同じく中世に帰属する集落の小倉中稲遺跡（八尾町側は翠尾Ⅱ遺跡）・小倉中稲Ⅱ遺跡が存在し、同一の微高地上にのる。集落規模は小さく散居村的な集落とも受け取れるが、面積の割に輸入品の青磁が多く出土する点が気にかかる。

第５項　千里Ａ遺跡（第15図）

(1) **概況と層序**　後家川左岸に位置する。基本層序は、１層：黒褐色土（耕作土）、２層：灰色粘質土＋同色砂・酸化鉄混、３層以下は河川の影響による堆積層（粘質土・砂・礫）となる。

(2) **小結**　試掘調査では越中瀬戸の擂鉢、軟元重寶が出土したが、遺構は検出されなかった。調査結果から河川の影響を強く受けてきた土地であることが分かり、散布していた遺物は流れ込みと思われる。

第６項　千里Ｂ遺跡（第24図）

(1) **概況と層序**　調査対象地は推定包蔵地範囲の西部にあり、赤江川左岸に位置する。基本層序は、１層：にぶい黄褐色土（耕作土）、２層：盛土層、３層：沼地堆積層（植物遺体・木片混じりの還元した粘質土）、４層：砂・礫層（地山）となる。

(2) **小結**　今回の調査区内には遺構・遺物はともに無く、散布していた遺物は流れ込みと思われる。調査結果や地元住民の話から、一帯は昔、沼地や河川があったようである。

第７項　千里Ｄ遺跡（第25・26図）

(1) **概況と層序**　赤江川と後家川の間に位置する。遺構・遺物が確認されたのは平成８年度西側調査区南端のみで、基本層序は１層：灰褐色土（耕作土）、２層：灰色シルト、３層：灰白色シルト、４層：灰色シルト、５層：オリーブ黒粘質土（中世前半遺物包含層）、６層：灰白色砂・礫（地山）となる。

(2) **遺構と遺物**　遺構として検出したのは、中世の溝のみである。遺物は、包含層より中世前半の中世土師器や珠洲が出土した他、周辺から中世土師器、越中瀬戸、伊万里が出土した。

(3) **小結**　平成８年度西側調査区南端より中世前半の遺構・遺物を確認したが、遺構密度は低く、遺物も少ない。調査対象地域の殆どは、旧沼地や旧河川であることが分かった。

第８項　千里Ｅ遺跡（第25・26図）

(1) **概況と層序**　後家川右岸に位置する。東方には小倉中稲遺跡、西方には千里Ｄ遺跡がある。基本層序は、１層：黄灰色シルト（耕作土）、２層：旧耕作土と床土・盛土の互層、３層：黄灰色シルト＋炭粒（古代の遺物包含層・中世末の遺構面）、４層：暗灰黄色シルト＋白砂（地山・古代の遺構面）となる。中世末の遺物包含層は遺存せず、古代の遺物包含層も所によって削平されている。また、T19～22は位置的に見て遺構が存在するのが自然であるが、遺物包含層の推定レベルから少なくとも20～30㎝下まで削平を受けており、遺存しない。

(2) **遺構**　調査区中央部に、古代・中世の溝・土坑・ピットを検出した。その他、近世の用水路が南北に走っている。

(3) **遺物（第27図）**　須恵器、古代土師器、中世土師器、珠洲、白磁、八尾、瓷器系陶器、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、丸山焼などが出土した。古代の遺物については、小破片の為、図化し得なかった。24～28は中世土師器。24は丸底気味で、体部が緩やかに内彎する。25・26は、器高が低く、平底から短い口縁部が外反して立つ。口縁部下端外面に爪跡が残る。27・28は丸底で口縁部が外反する。28は外反が強く、外面に指頭圧痕を残す。25・26は、15世紀前半。24・27・28は15世紀末～16世紀前半。29は白磁の小型の合子。釉は薄く、かえり部以外に施釉する。30～33は珠洲。30は甕で平行の叩き目、33は壺で綾杉状の叩き目を施す。34は瓷器系陶器の体部破片で、外面に格子文の押印がある。加賀か。35は八尾の体部破片。36は越中瀬戸の向付皿。底部糸切りで、見込み中央部のみ施釉する。

(4) **小結**　調査では、調査区中央部に古代・中世の遺構・遺物を確認した。遺構面は古代１面、中世（15世紀前半～16世紀前半）１面であるが、削平により検出面が同一になっている場所もある。遺構遺存範囲は広くないが、後世の改変の影響を強く受けており、本来はもっと広範囲に広がっていたものと考える。

Ⅲ　事業区域外における試掘調査

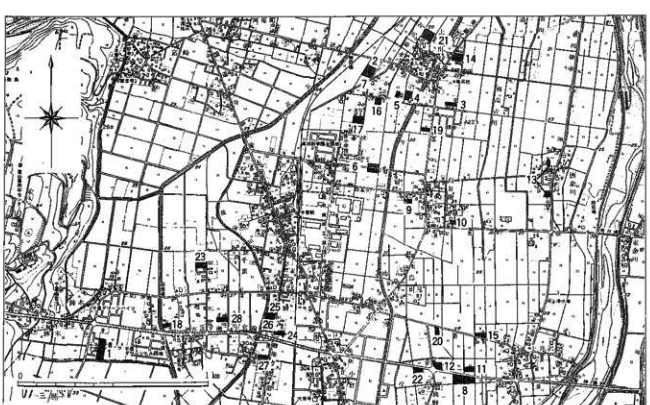
周辺地区では、様々な開発に先立つ試掘調査を28回にわたり実施してきた。うち、遺構の遺存が確認されたのは南部Ⅰ遺跡（平成８・９年度調査）、千里Ｃ遺跡（平成８年度調査）の３件のみであった。尚、南部Ⅰ遺跡平成８年度調査箇所については平成９年度に本調査を実施している。それ以外の場所では現状保存されており、以下にはその調査概要をまとめた。

南部Ⅰ遺跡（平成９年度12月試掘調査　第21図、第41図）

調査対象地は遺跡南部に位置する。調査ではトレンチ１本を掘削した。調査の結果、古代の遺構（溝・土坑・ピット）と遺物包含層、中世の遺構（溝・土坑）と遺物包含層を確認した。またトレンチ東側には古代から中世の谷地形が伸びている。出土遺物は、古代の土師器・須恵器・土錘、中世の土師器・瀬戸美濃がある。遺物の年代は、古代は９世紀中葉～後葉、中世は14世紀である。514～522は土師器で、514は鍋Ｃ、515は鍋Ｄ、516～522・529は椀Abで、522は外底面を高台状に削り出す。523は須恵器杯、524は須恵器甕頸部。525・526は土錘Ｂで、525は長さ6.4cm幅４cm穴径1.3cm、526は長さ4.1cm幅２cm穴径0.6cmを測る。527は珠洲の壺体部破片で綾杉状に叩き目を施す。528は中世土師器で、非ロクロ成形。530は瀬戸美濃の天目茶碗で、内外面に鉄釉をかける。

千里Ｃ遺跡（平成８年度試掘調査　第42図）

調査対象地は遺跡南西部に位置する。調査ではトレンチを13本掘削した。調査の結果、調査対象地南部に弥生中期の遺構（柱穴・土坑）と遺物包含層を検出した。出土遺物には弥生土器、珠洲、瀬戸美濃碗、越中瀬戸小皿などがある。531～540は弥生土器で、中期の小松式に比定される。摩滅の激しいものが多いが、調整の分かるものは内外面ハケメである。531～538は甕、539～540は壺。531・540は口縁部内面に羽状列点文を、539は楕書格子文を施す。540は口縁部が緩い波状になる。538は底部以外の外面に煤が付着する。541は珠洲体部破片。



第10図　事業区域外における試掘調査位置図(1/20,000)

番号	期間(実働日数)	調査原因	遺跡推定地名称	対象面積(㎡)	発掘面積(㎡)	遺構・遺物包含層の有無	備考
1	H 8.5.10～5.14(3日間)	宅地造成工事	千里C	4,000	160	有	現状保存
2	H 8.5.15～5.16(2日間)	倉庫造成工事	上吉川I	1,712	84	無	
3	H 8.9.12(1日間)	個人住宅建築	上吉川I	964	45	無	
4	H 8.9.12(1日間)	資材置場造成	上吉川I	1,308	56	無	
5	H 8.9.12(1日間)	資材置場造成	上吉川I	336	19	無	
6	H 8.9.17(1日間)	分譲住宅建設	上吉川I近隣	1,494	65	無	
7	H 8.9.18(1日間)	個人住宅建築	上吉川I	830	32	無	
8	H 8.9.18(1日間)	ガソリンスタンド等建設	南部I	3,607	46	無	
9	H 8.9.19(1日間)	個人住宅建築	南部I	470	20	無	
10	H 8.9.19(1日間)	個人住宅建築	南部I	224	2	無	
11	H 8.11.14～11.15(2日間)	事務所及び倉庫建設	南部I	850	32	無	
12	H 8.12.24(1日間)	個人住宅・店舗建設	南部I	1,568	84	有	H 9 本調査
13	H 9.5.2(1日間)	格納庫及び作業所建設	西余川	920	14	無	
14	H 9.5.1(1日間)	資材置場造成工事	上吉川I	1,909	35	無	
15	H 9.5.2(1日間)	農家分家住宅建築及び資材置場造成工事	南部I	854	22	無	
16	H 9.6.25(1日間)	個人住宅建設	上吉川I	499	31	無	
17	H 9.8.28(1日間)	宅地造成	上吉川I	1,726	55	無	
18	H 9.8.28(1日間)	個人住宅建築	千里B	481	29	無	
19	H 9.9.29(1日間)	駐車場造成	上吉川I	884	35	無	
20	H 9.9.29(1日間)	個人住宅建築	南部I	500	45	無	
21	H 9.11.14(1日間)	農機具格納庫建設	上吉川I	2,518	89	無	
22	H 9.12.19(1日間)	農家住宅建築	南部I	1,024	29	有	現状保存
23	H11.3.11(1日間)	分譲宅地造成	千里D	1,894	35	無	
24	H11.8.25(1日間)	個人住宅建築	千里E	439	17	無	
25	H11.9.29(1日間)	個人住宅建築	千里E	400	16	無	
26	H11.9.29(1日間)	宅地及び作業所建築	千里E	1,230	24	無	
27	H11.9.29(1日間)	建売分譲住宅造成	千里E	715	22	無	
28	H11.10.5(1日間)	個人住宅建築	千里D	927	29	無	

第3表　事業区域外における試掘調査一覧

Ⅳ ま と め

1．試掘調査について

平成７年度に始まった県営担い手育成基盤整備事業に係る試掘調査は、５ヶ年をかけて平成11年度に完了した。その結果、弥生時代終末期から近世に至る６箇所の遺跡を確認した。各遺跡の位置は第11図に、内容は第４表に載せている。千里Ｂ遺跡については、試掘調査で遺構を検出しなかった地域を範囲より除外したが、大部分は試掘調査未完了であり遺跡推定地に留まっている。また、千里Ｄ遺跡は遺跡としているが、確認しているのは中世の溝１条のみであり、詳細は不明確である。遺跡推定地のうち西余川Ⅰ遺跡と千里Ａ遺跡には、全域において遺構の遺存が認められず、消失した。採集された遺物は流れ込みと考えられる。

2．遺跡の分布状況

圃場整備事業範囲が位置する赤江川と井田川に挟まれた地域には、河川沿いに帯状に伸びる微高地上に古くから集落が形成されてきた。各遺跡毎のまとめは、Ⅱ章の小結にそれぞれ記述しているので、ここでは丘陵部と井田川に挟まれた地域の遺跡分布状況を主な時代別にまとめる。

弥生時代終末～古墳時代初頭

・西高吉川と峠川間：上吉川Ⅰ遺跡（月影Ⅱ式）、南部Ⅰ遺跡（月影Ⅰ式・月影Ⅱ式・白江式・古府クルビ式・高畠式）、八尾町翠尾Ⅰ遺跡（月影Ⅰ式・月影Ⅱ式・白江式）

古代

・西高吉川と峠川間：上吉川Ⅰ遺跡東部、南部Ⅰ遺跡（６世紀末～７世紀中葉、８世紀中葉～10世紀初頭）、八尾町翠尾Ⅰ遺跡（８世紀～９世紀）

・後家川右岸：千里Ｅ遺跡

・後家川左岸：千里Ｂ･Ｃ･Ｄ･Ｆ遺跡

中世

・西高吉川と峠川間：上吉川Ⅰ遺跡東部、南部Ⅰ遺跡（12世紀後半～16世紀前半）、八尾町翠尾Ⅰ遺跡（12世紀後半～15世紀）

・峠川左岸：上吉川Ⅰ遺跡西部（13世紀、15世紀）、南部Ⅱ遺跡（12世紀後半～13世紀前半、15世紀）、小倉中稲Ⅱ遺跡（13世紀後半～14世紀頃）、小倉中稲遺跡（12世紀中頃～13世紀前半、14世紀前半、15世紀後半～16世紀前半）、八尾町翠尾Ⅱ遺跡

・後家川右岸：千里Ｅ遺跡（15世紀前半～16世紀前半）

・後家川左岸：千里Ｂ･Ｃ･Ｄ遺跡

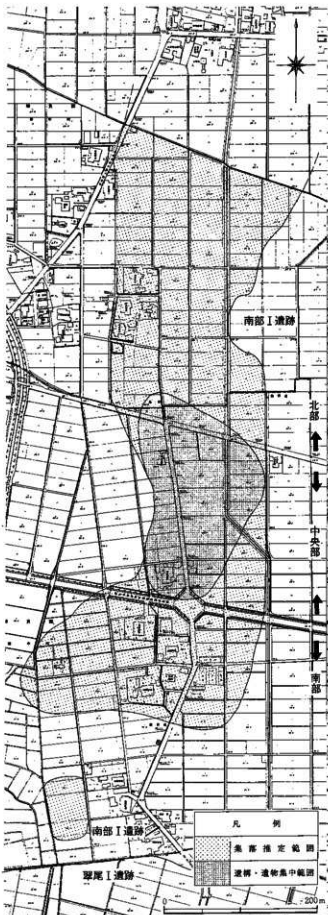
西高吉川と峠川間に形成された上吉川Ⅰ遺跡・南部Ⅰ遺跡・翠尾Ⅰ遺跡は、弥生時代から中世にかけて断続的に形成された大規模な複合遺跡として一つに繋がるものである。集落範囲は時代ごとに変移し、中心地区が認められたり、いくつかのまとまりに分かれたりする。第12～14図は、南部Ⅰ遺跡における遺構・遺物集中範囲を、大まかな時代ごとに分けて示したものである。この地域は井田川左岸に位置しており、水上交通に便利な土地であった事から、古くから栄えてきたといえる。

一方、峠川左岸の微高地には、中世になって複数の集落が出現する。この時代にはその他の地域においても、いくつもの集落が形成されており、なかには南部Ⅱ遺跡や小倉中稲Ⅱ遺跡のような散居村的な小集落とも受け取れるものもある。現在の農村集落に繋がる村落がこの時期に形成されたと考える。

第11図　遺跡分布図(1/15,000)

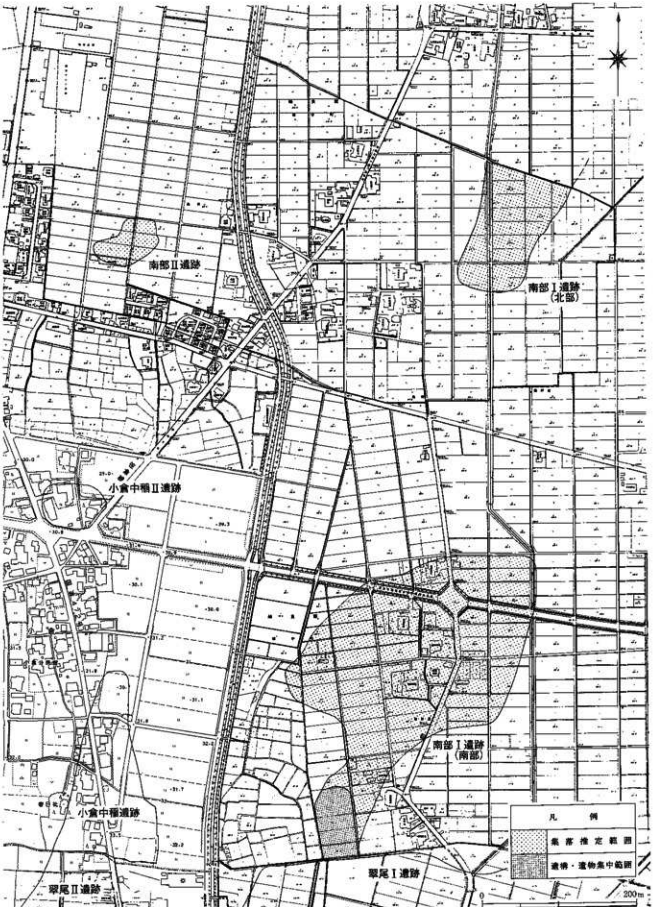
番号	遺跡名	時代	遺跡の種別	推定面積(㎡)	備考
1	上吉川Ⅰ遺跡	縄文、弥生、古代、中世、近世	集落・散布地	152,740	
2	南部Ⅰ遺跡	弥生、古墳、古代、中世、近世	集落・散布地	307,200	試掘未調査地区有。 高日附遺跡・小倉緑水河原遺跡含む。
3	南部Ⅱ遺跡	中世	集　落	3,320	
4	千里Ｂ遺跡	古代、中世、近世	散布地	19,960	試掘未調査地区有。
5	千里Ｄ遺跡	古代、中世、近世	集落？・散布地	143,180	
6	千里Ｅ遺跡	古代、中世、近世	集落・散布地	77,990	
7	※千里Ｃ遺跡	弥生、古代	集落・散布地	(9,000)	事業外
合計				704,390 (713,390)	

第4表　県営担い手育成基盤整備事業(婦中南部、千里地区)**に係る遺跡総括表**(平成12年３月現在)



第12図　南部Ⅰ遺跡　弥生終末～古墳初頭集落範囲(1/5,000)

第13図　南部Ⅰ遺跡　古代集落範囲(1/5,000)

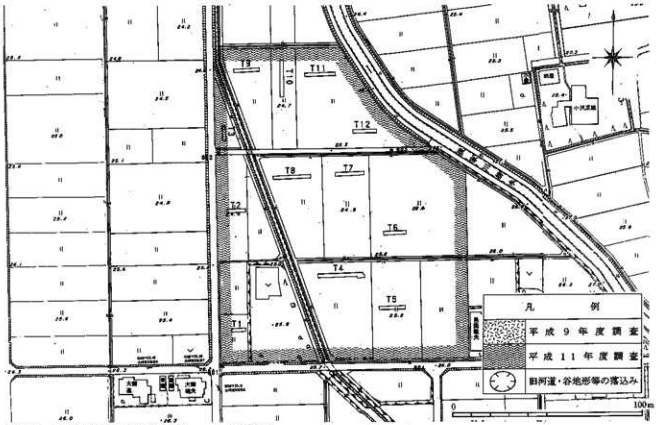


第14図　南部Ⅰ・Ⅱ遺跡ほか中世集落範囲(1/5,000)

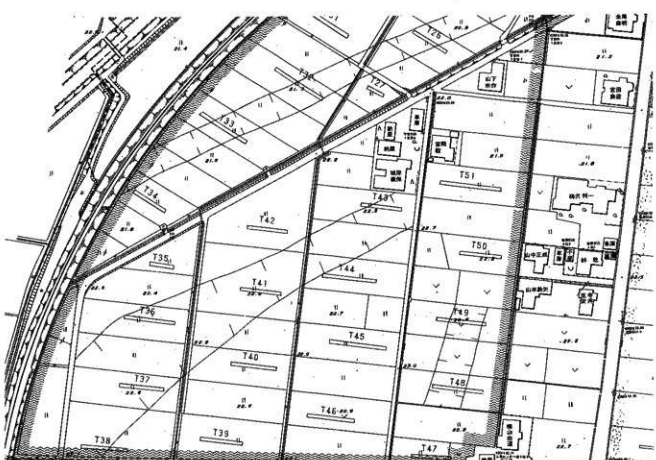
※今回調査したもの以外は集落推定範囲等は表示していない。

参考文献

石川考古学研究会シンポジウム実行委員会1986『シンポジウム「月影式土器」について　報告編』
岡本淳一郎・三島道子・町田賢一・上田尚美1999「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究紀要第２号』
小田木治太郎1989「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ 石川考古学研究会々誌第32号』石川考古学研究会
内田亜希子1997「越中における古代土師器の編年予察」『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
大橋康二1988『古伊万里』別冊太陽63平凡社
金沢市教育委員会1995『石川県金沢市上新屋遺跡Ⅰ　第２分冊古墳時代編』
金沢市教育委員会1996『西念・南新保遺跡Ⅳ』
金沢市埋蔵文化財センター1999『戸水遺跡群Ⅰ　戸水ホコダ遺跡　金沢市文化財紀要150』
北野博司・池野正男1989「第１章　各種生産部門の成立と展開１北陸における須恵器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
久々忠義1999「古墳出現期の土器について」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会
小杉町教育委員会1994『小杉町針原東遺跡発掘調査報告』
小杉町教育委員会1991『上野南遺跡群発掘調査報告』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
酒井重洋1997「中世土師器の分類について－清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡から－」『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』
田嶋明人1986「Ｄ考察―漆町遺跡出土土器の編年的考察―」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
富山県教育委員会1986『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群　第８次緊急発掘調査概要　－小杉丸山遺跡―』
富山県埋蔵文化財センター1990『栗山椿原遺跡　南中田Ａ遺跡　任海鎌倉遺跡　南中田Ｃ遺跡　富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要Ⅰ』
富山県埋蔵文化財センター1991『富山県宮山市南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』
富山県埋蔵文化財センター1994『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)　吉倉Ｂ遺跡』
富山県埋蔵文化財センター1993『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会1992『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)―布目沢北遺跡第３次調査―』
永井久美男1994『中世の出土銭―出土銭の調査と分類―』兵庫埋蔵銭調査会
富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブ1967『富山県高岡市勝木原遺跡Ⅰ（第Ⅱ地点発掘調査報告）』
婦中町1996・1996『婦中町史』
婦中町教育委員会1993『富山県婦中町小倉中稲Ⅱ遺跡』
婦中町教育委員会1993『富山県婦中町小倉中稲遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会1994『富山県婦中町小倉中稲遺跡発掘調査報告(2)』
婦中町教育委員会1995『千坊山遺跡(1)』
婦中町教育委員会1998『富山県婦中町南部Ⅰ遺跡発掘調査報告』
北陸中世土器研究会1992『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
北陸中世土器研究会1997『北陸の漆器考古学－中世とその前後―第１分冊　第10回北陸中世土器研究会記念特集号』
北陸中世土器研究会1997『中近世の北陸－考古学が語る社会史』桂書房
高堀勝喜・橋本澄夫・谷内尾晋司・田島明人ほか1996『縄文時代北陸』『弥生時代北陸』『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社
谷内尾晋司1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学　石川考古学研究会々誌第26号』石川考古学研究会
八尾町教育委員会1996『富山県八尾町翠尾Ⅰ遺跡試掘調査概要』
八尾町教育委員会1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書１』
八尾町教育委員会1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告(2)』
八尾町教育委員会1997『薄尾遺跡・翠尾Ⅰ遺跡・妙川寺遺跡試掘調査報告』
吉岡康暢1989『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

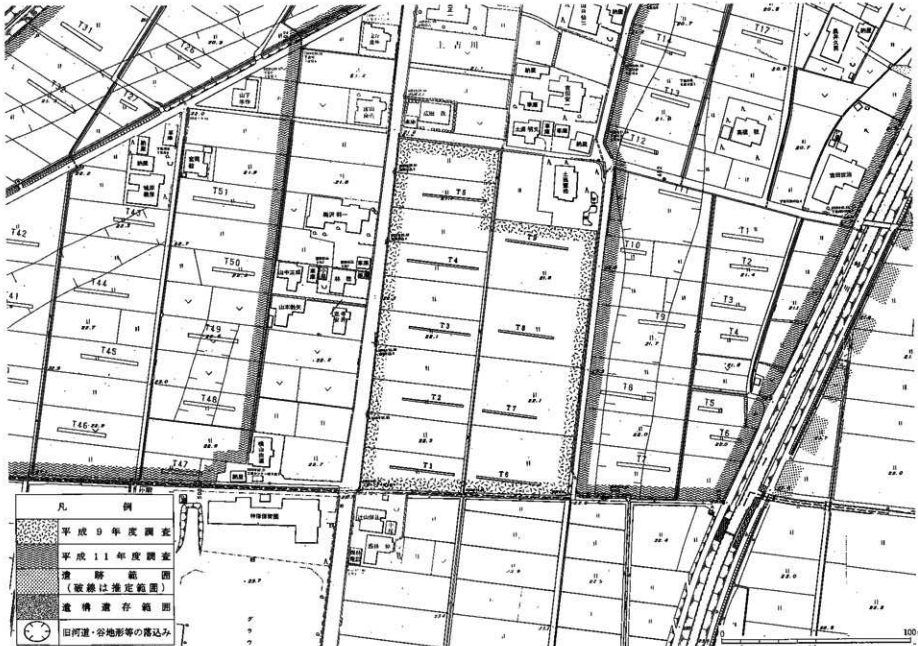


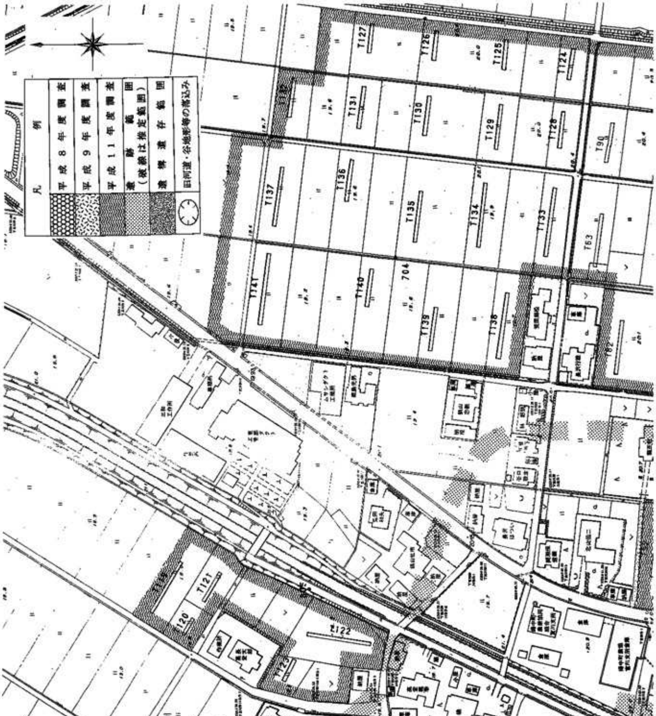
第15図　試掘調査概要図(1/2,000)　　千里地区



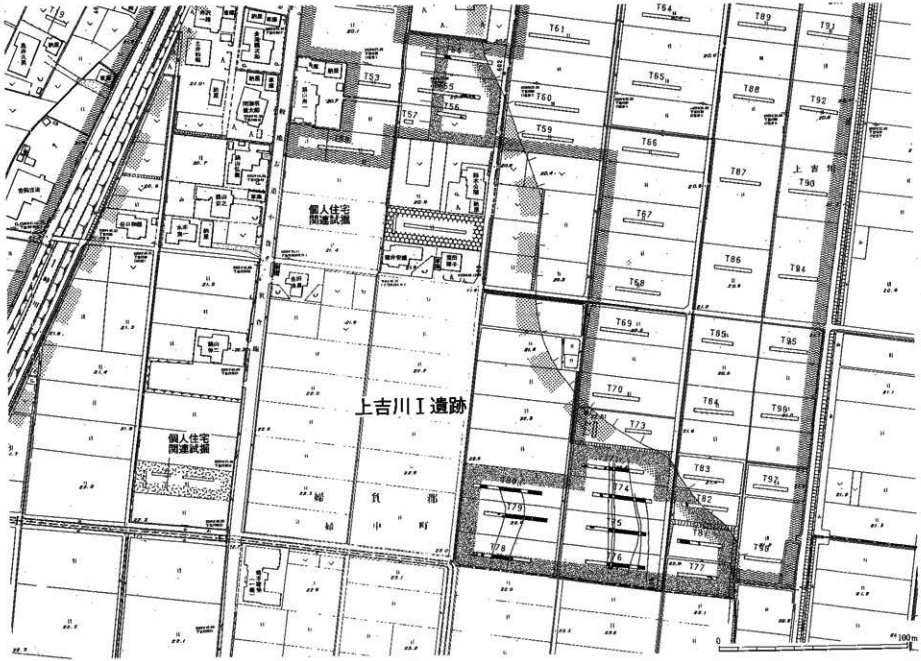
第16図　試掘調査概要図(1/2,000)　　上吉川地区

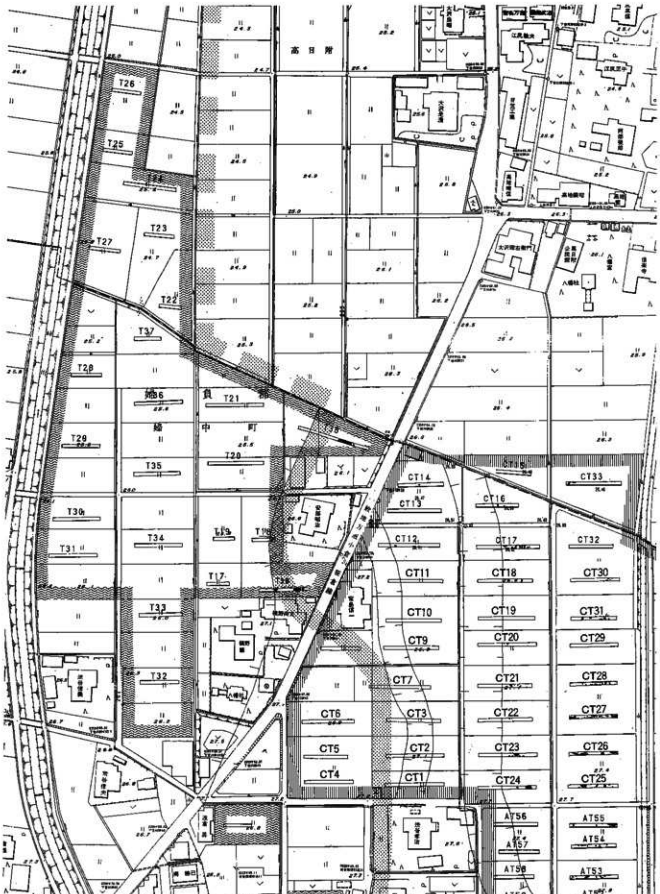
第17図　試掘調査概要図(1/2,000)　　上吉川地区


凡例
平成9年度調査
平成11年度調査
遺跡範囲
（破線は推定範囲）
遺構遺存範囲
旧河道・谷地形等の落込み
100m

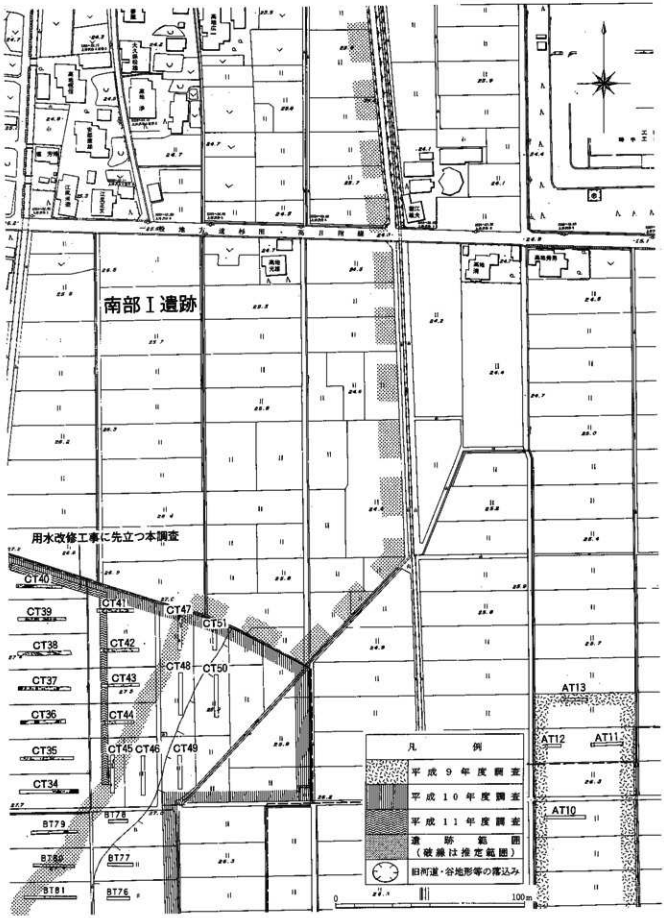


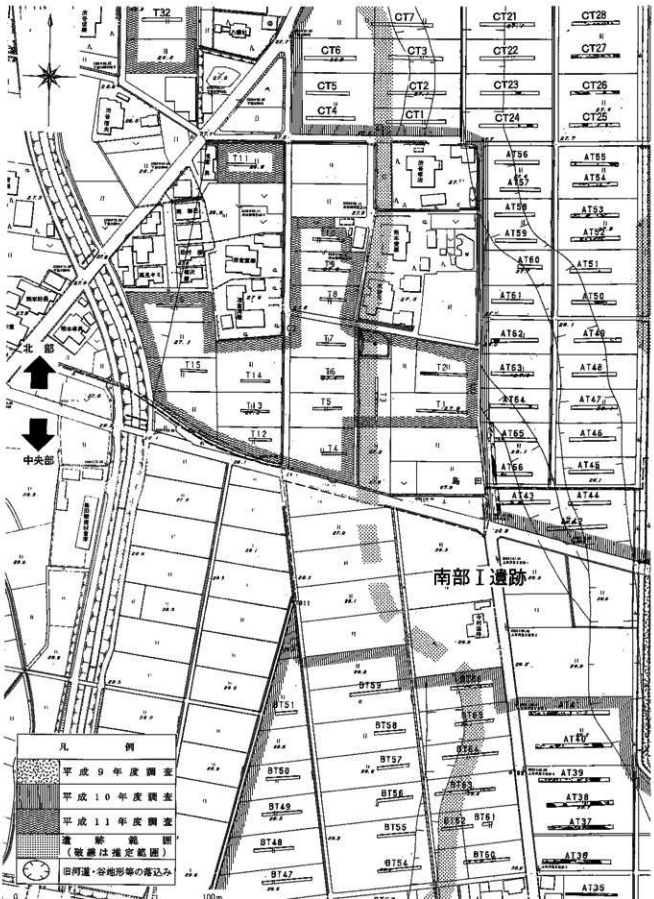
第18図　試掘調査概要図(1/2,000)　　上吉川地区


上吉川Ⅰ遺跡
個人住宅
関連試掘
個人住宅
関連試掘
上吉川
T53
T56
T57
T59
T60
T61
T64
T65
T66
T67
T68
T69
T70
T73
T74
T75
T76
T77
T78
T79
T82
T83
T84
T85
T86
T87
T88
T89
T90
T91
T92
T93
T94
T95
T96
T97
T98
0
100m

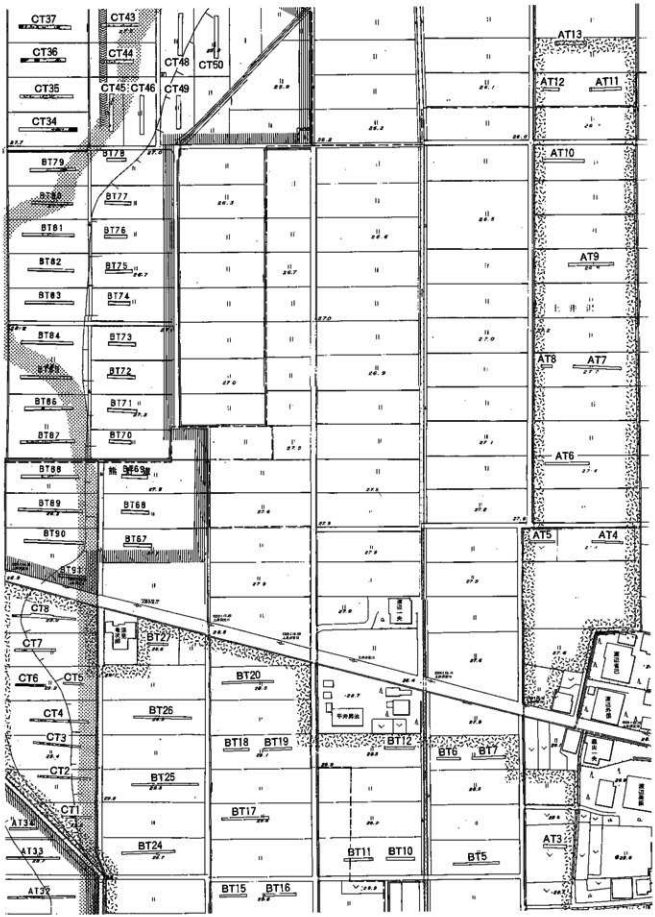


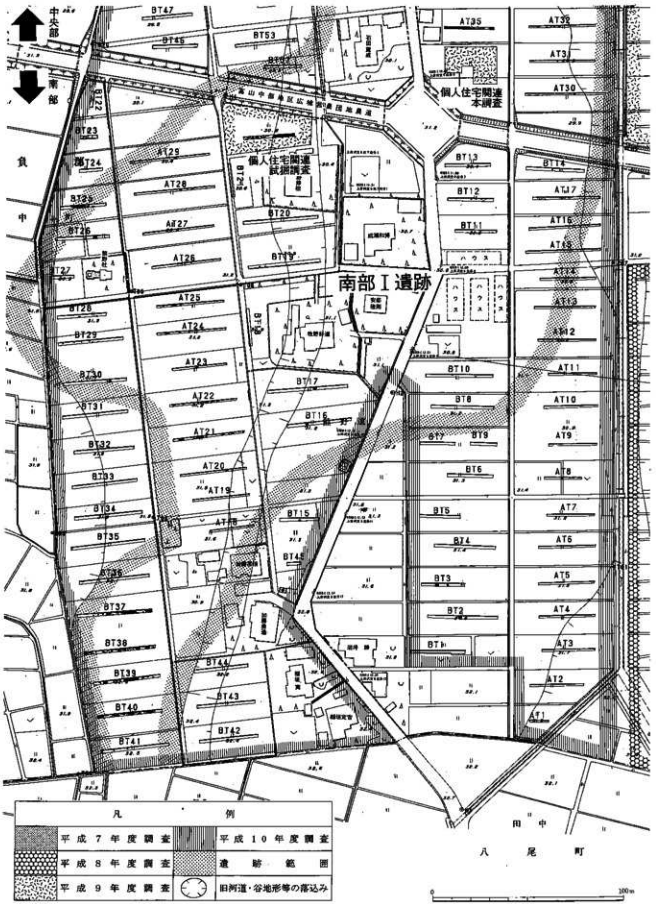
第19図　試掘調査概要図(1/2,000)　　鳥田地区


南部Ⅰ遺跡
用水改修工事に先立つ本調査
CT40
CT39
CT38
CT37
CT36
CT35
CT34
CT41
CT42
CT43
CT44
CT45
CT46
CT47
CT48
CT49
CT50
CT51
AT13
AT12
AT11
AT10
BT79
BT78
BT77
BT76
凡例
平成９年度調査
平成１０年度調査
平成１１年度調査
遺跡範囲
（破線は推定範囲）
旧河道・谷地形等の落込み
0
100m

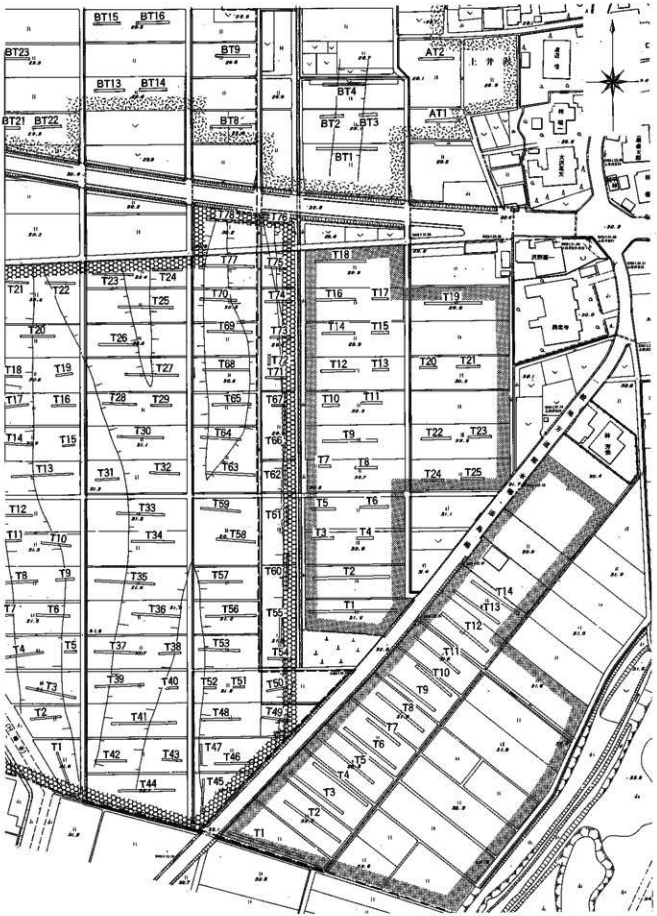


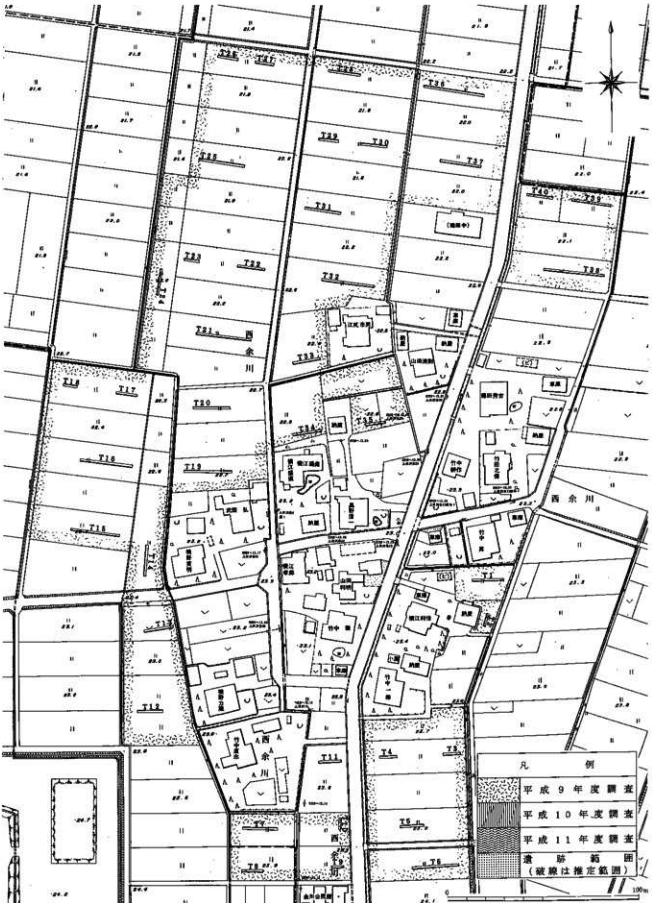
第20図　試掘調査概要図(1/2,000)　　島田地区


CT37
CT43
CT36
CT44
CT48
CT50
CT35
CT45
CT46
CT49
CT34
AT13
AT12
AT11
BT79
BT78
AT10
BT80
BT77
BT81
BT76
AT9
BT82
BT75
BT83
BT74
BT84
BT73
AT8
AT7
BT85
BT72
BT86
BT71
BT87
BT70
AT6
BT88
BT89
BT69
BT90
BT67
AT5
AT4
BT91
CT8
CT7
BT27
CT6
CT5
BT20
CT4
BT26
CT3
BT18
BT19
BT12
BT6
BT7
CT2
BT25
CT1
BT17
AT34
AT3
AT33
BT24
BT11
BT10
BT5
AT32
BT15
BT16



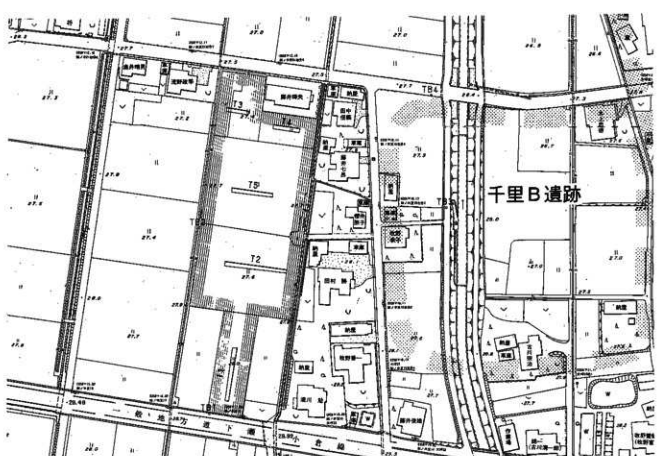
第21図　試掘調査概要図(1/2,000)　　熊野道地区


BT15
BT16
BT23
BT9
AT2
BT13
BT14
BT4
BT21
BT22
BT8
BT2
BT3
AT1
BT1
T78
T76
T77
T75
T18
T21
T22
T23
T24
T25
T70
T74
T16
T17
T19
T20
T26
T69
T73
T14
T15
T18
T19
T27
T68
T72
T71
T12
T13
T20
T21
T17
T16
T28
T29
T65
T67
T10
T11
T14
T15
T30
T64
T66
T9
T22
T23
T13
T31
T32
T63
T62
T7
T8
T24
T25
T12
T33
T59
T61
T5
T6
T11
T10
T34
T58
T3
T4
T8
T9
T35
T57
T60
T2
T7
T6
T36
T56
T55
T1
T4
T5
T37
T38
T53
T54
T3
T39
T40
T52
T51
T50
T2
T41
T48
T49
T1
T42
T43
T47
T46
T44
T45
T14
T13
T12
T11
T10
T9
T8
T7
T6
T5
T4
T3
T2
T1

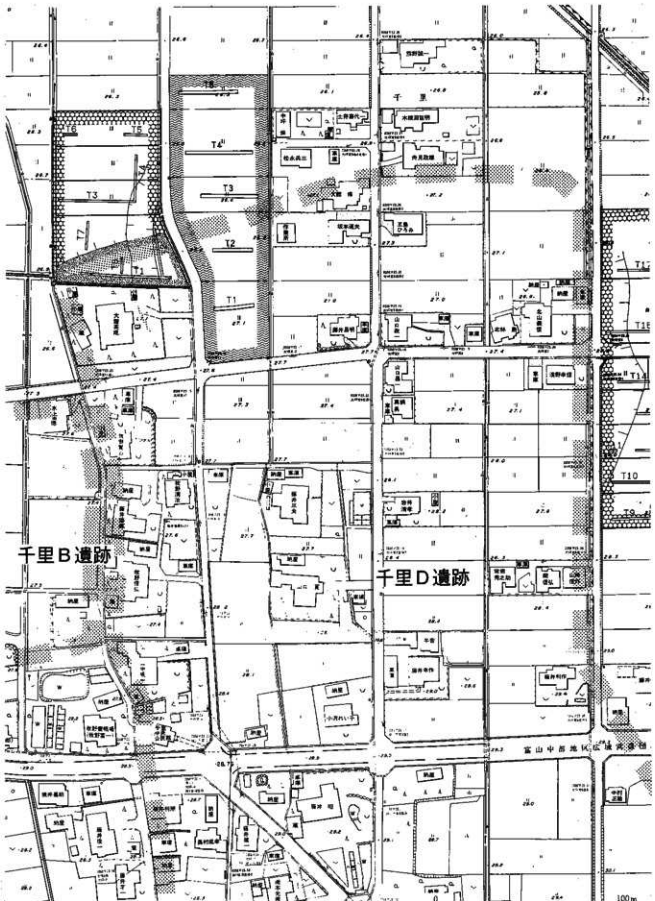


第22図　試掘調査概要図(1/2,000)　　西余川地区

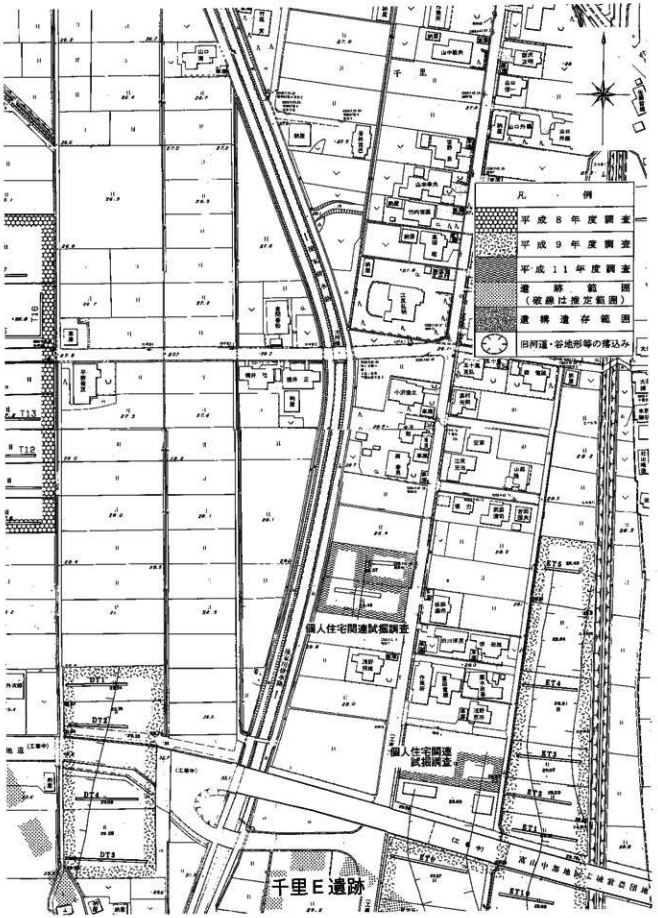
第23図　試掘調査概要図(1/2,000)　　島田地区

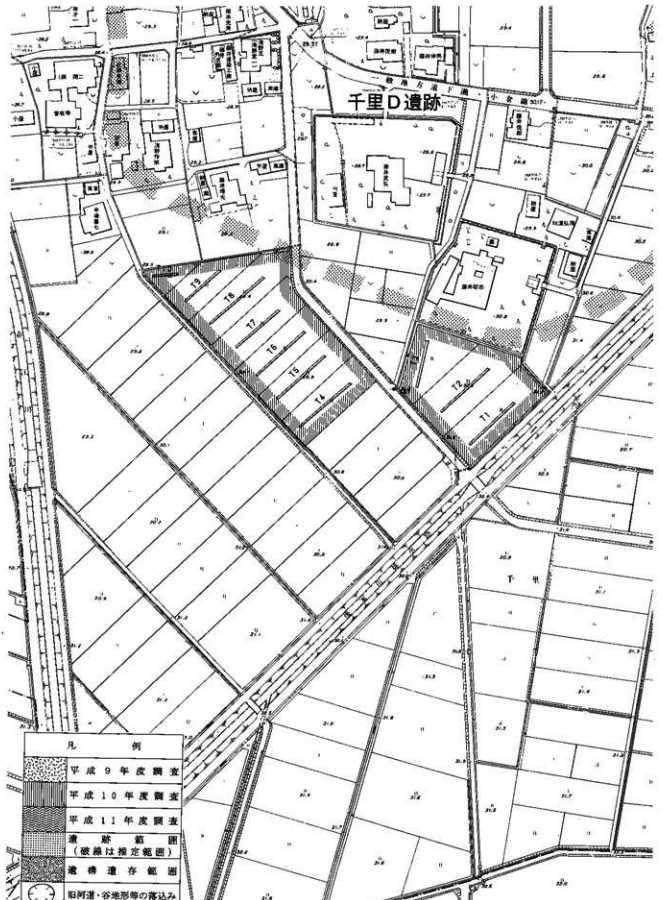


第24図　試掘調査概要図(1/2,000)　　千里地区

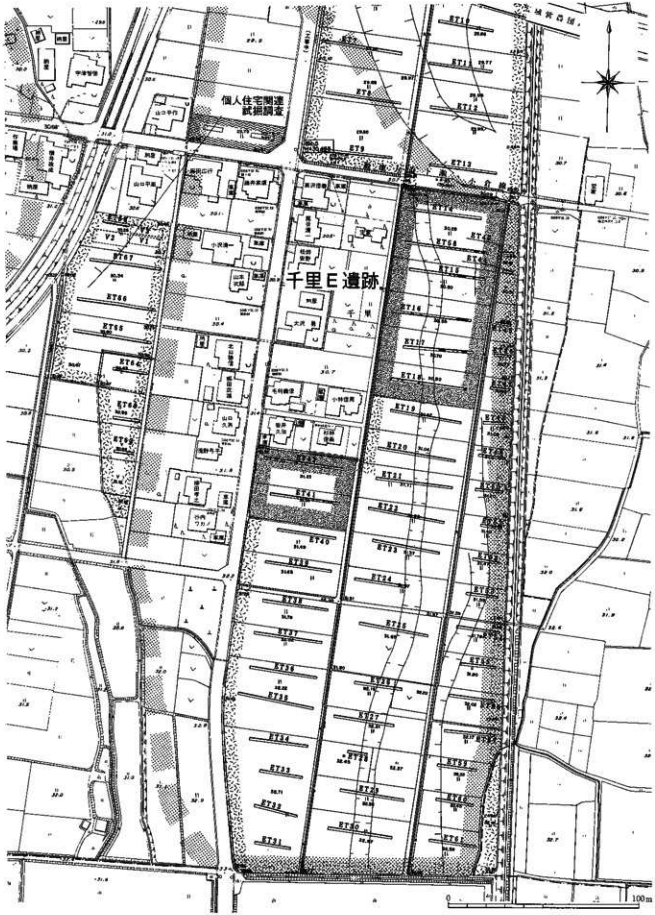


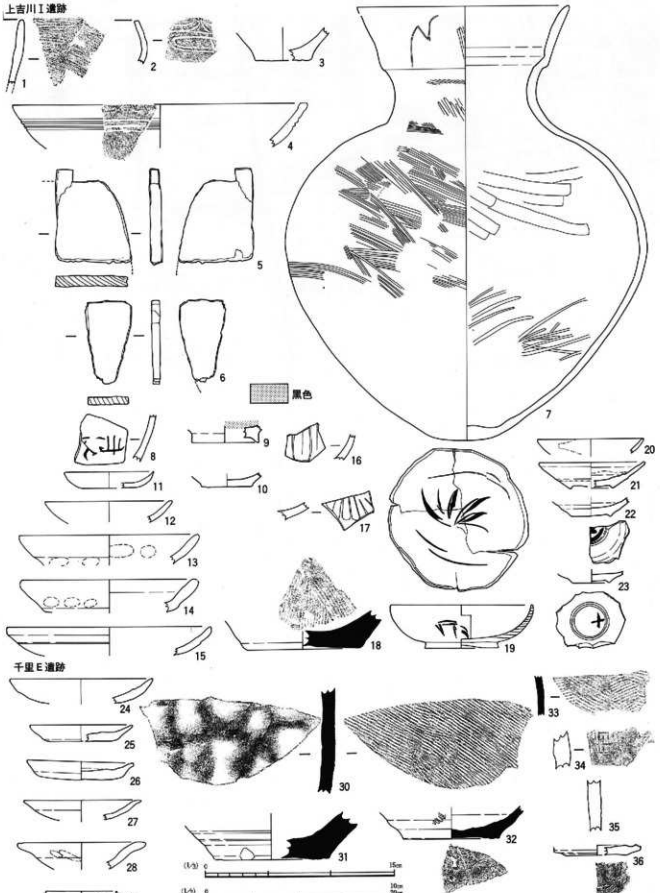
第25図　試掘調査概要図(1/2,000)　　千里地区


凡　例
平成８年度調査
平成９年度調査
平成１１年度調査
遺跡範囲
（破線は推定範囲）
遺構遺存範囲
旧河道・谷地形等の落込み
千里
個人住宅関連試掘調査
個人住宅関連
試掘調査
千里Ｅ遺跡
T16
T13
T12
DT1
DT2
DT3
DT4
DT5
ET1
ET2
ET3
ET4
ET5



第26図　試掘調査概要図(1/2,000)　　千里地区

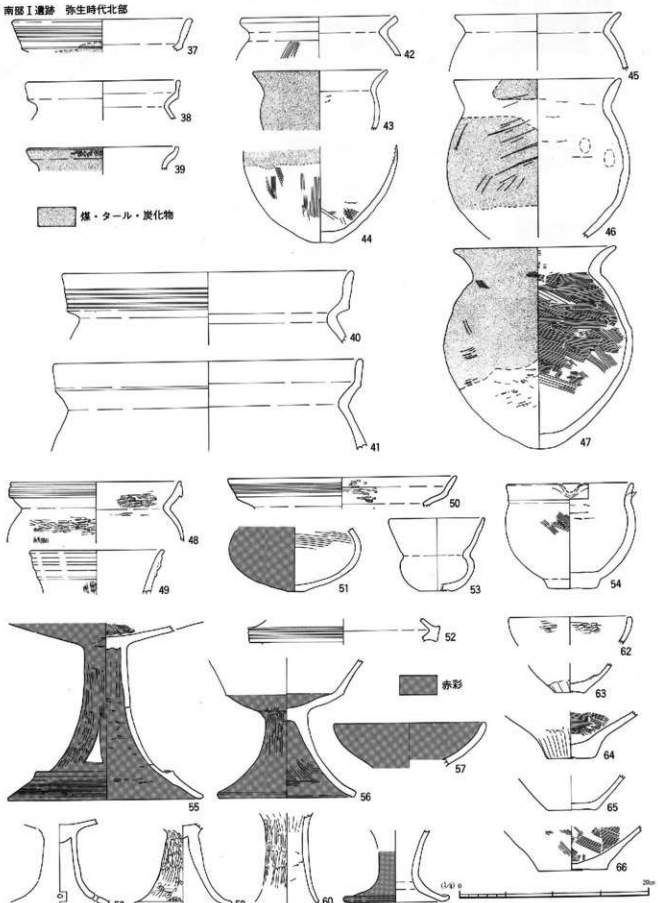

個人住宅関連
試掘調査
千里E遺跡
100m



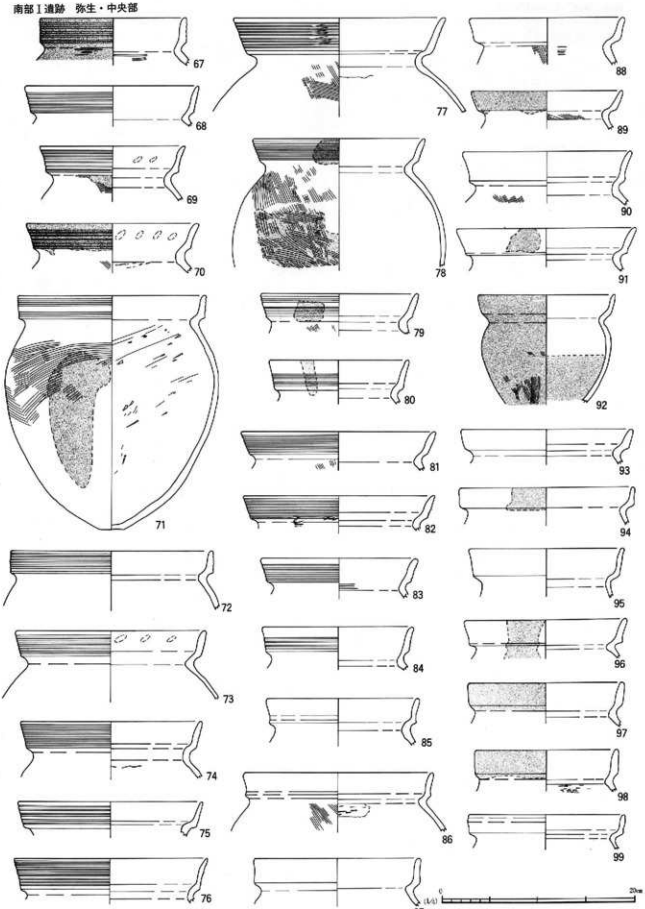
第27図　遺物実測図（8は1/2、11～15・24～28は1/3、その他は1/4）

〈上吉川Ⅰ遺跡〉　T2：16、T7：21、T54：5、T55：1～3、T57：6、T75：7、T78：4・9・10・12、T82：22、T83：8、T106：15・17、T108：11・19、T109：13・18、T110：14、T111：23、T136：20

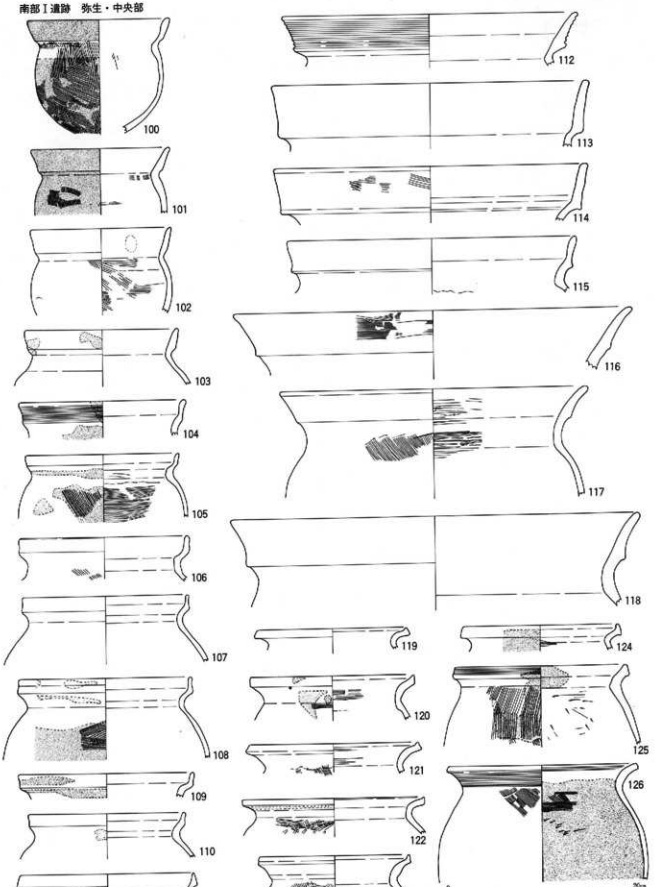
〈千里E遺跡〉　T8：30、T14：31・32、T16：33、T17：28、T19：29、T28：27、T32：34、T35：24・35、T50：25・26、表採：36



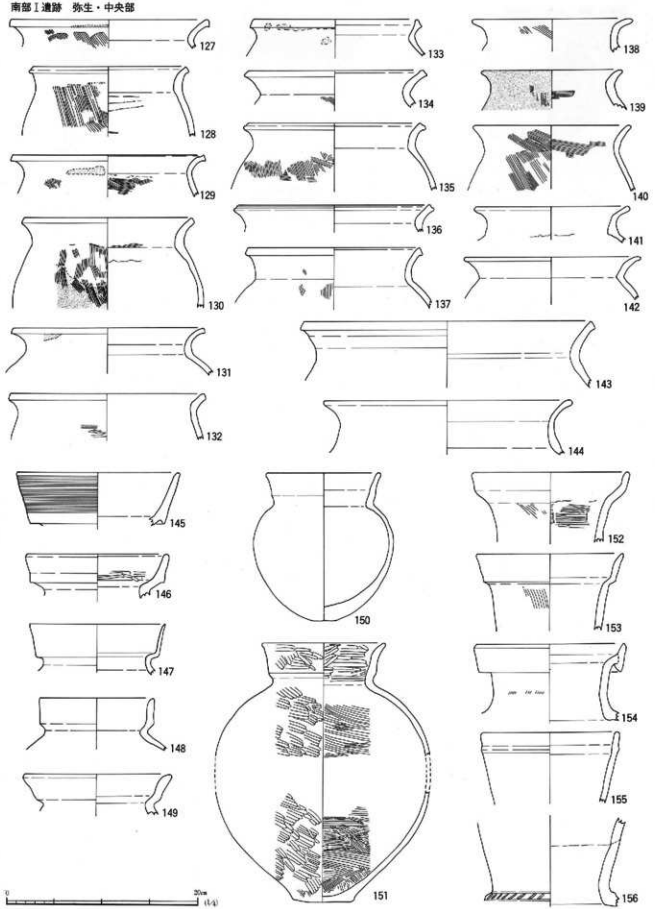
第28図　遺物実測図(1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　北部　平成10年度調査　AT43：49・63・64、AT46：43、AT63：58、BT89：53、BT91：42、CT９：51、CT10：40、CT12：48・50・52・55・60、CT17：65、CT24：38・61、CT27：39、CT31：41、CT35：56・66、CT43：44―47・54
平成11年度調査　T１：37、T２：57、T３：59・62



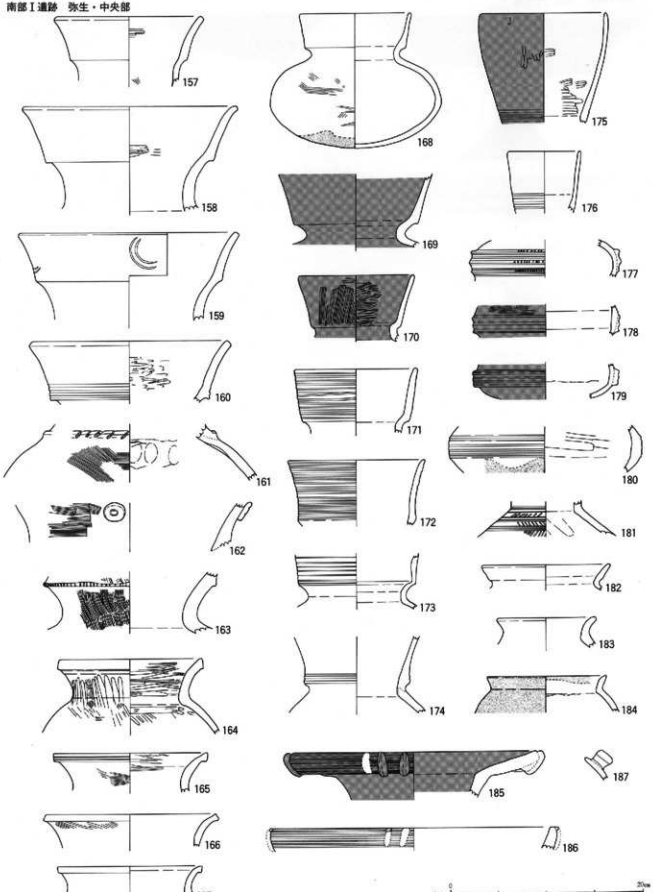
第29図　遺物実測図(1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　中央部　平成９年度調査　CT４：67、CT５：85～89、CT７：68、CT８：83
平成10年度調査　AT38：90、AT40：91～93、BT60：69・70・94、BT61：95、
BT64：71～82・84・96～98、BT66：99



第30図　遺物実測図(1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　中央部　平成９年度調査　CT２：126、CT５：104・119・120・125、CT６：101・116
平成10年度調査　AT38：102・105・117・118・121、
BT60：103・106～108・111・113・122、BT61：114、BT63：109・110、
BT64：100・112・115・123・124

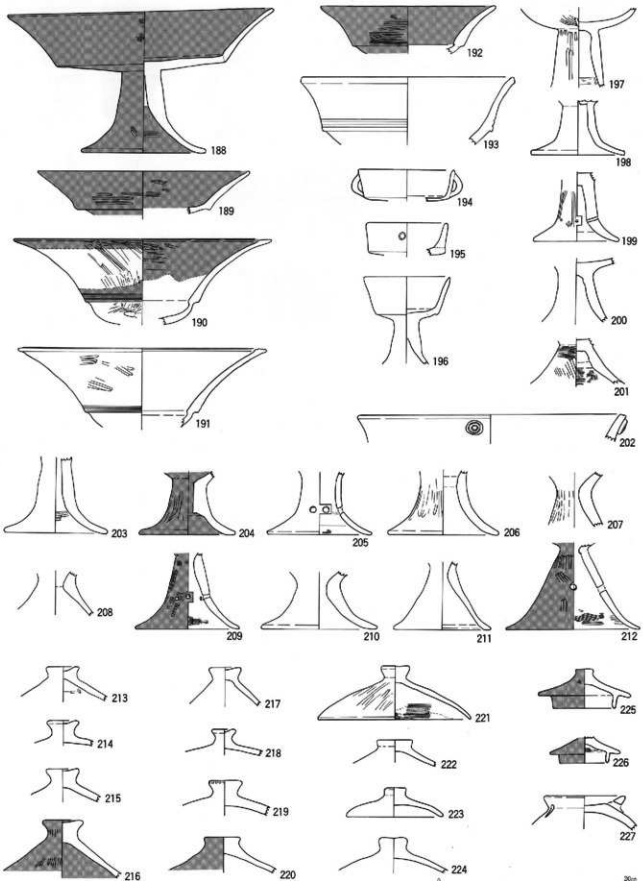


第31図　遺物実測図(1/4)
(南部Ⅰ遺跡)　中央部　平成９年度調査　CT５：127・152、CT６：142・150
平成10年度調査　AT36：144、AT38：128～131・139・143・146・149・151・154、
BT60：132・133・147・156、BT63：134・140・141、
BT64：135～137・145・148・153・155
平成11年度調査　T７：138

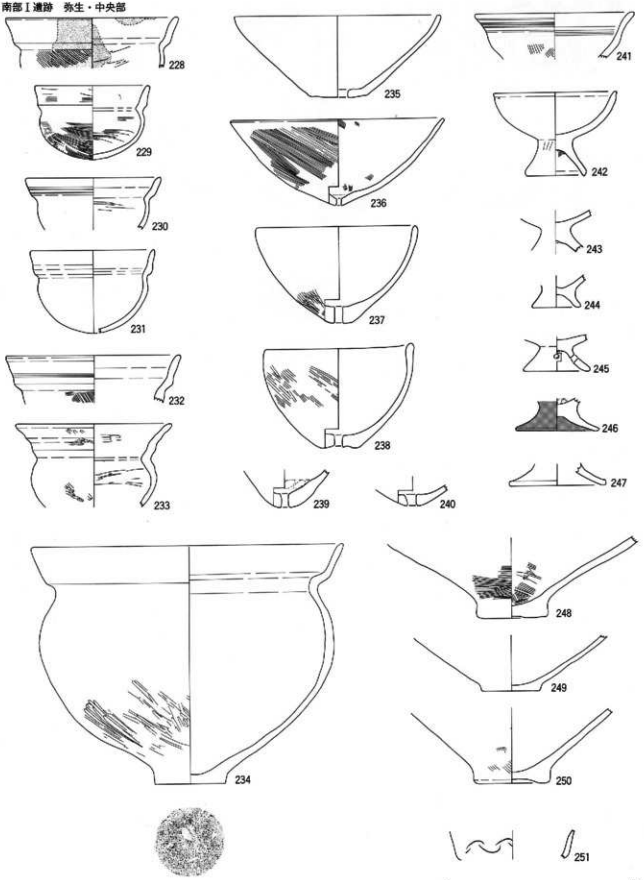


第32図　遺物実測図(1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　中央部

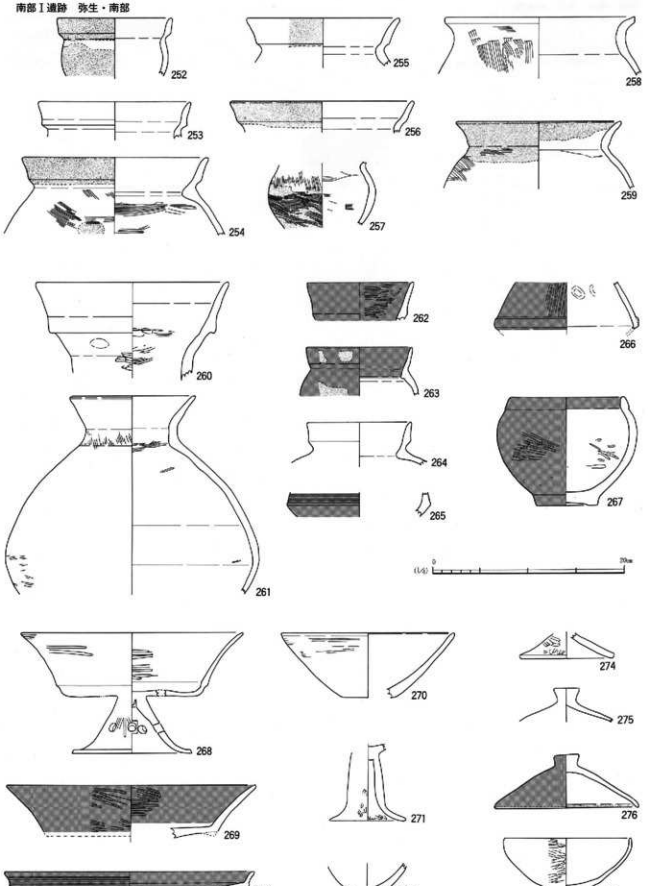
平成９年度調査　CT４：164・185・186、CT５：157・171・177、CT７：183・187
平成10年度調査　AT38：165・168・169・175・178・179、AT40：158、BT60：159・173、BT61：184、BT63：162・174・180～182、BT64：160・166・167・172・176、BT66：163・170



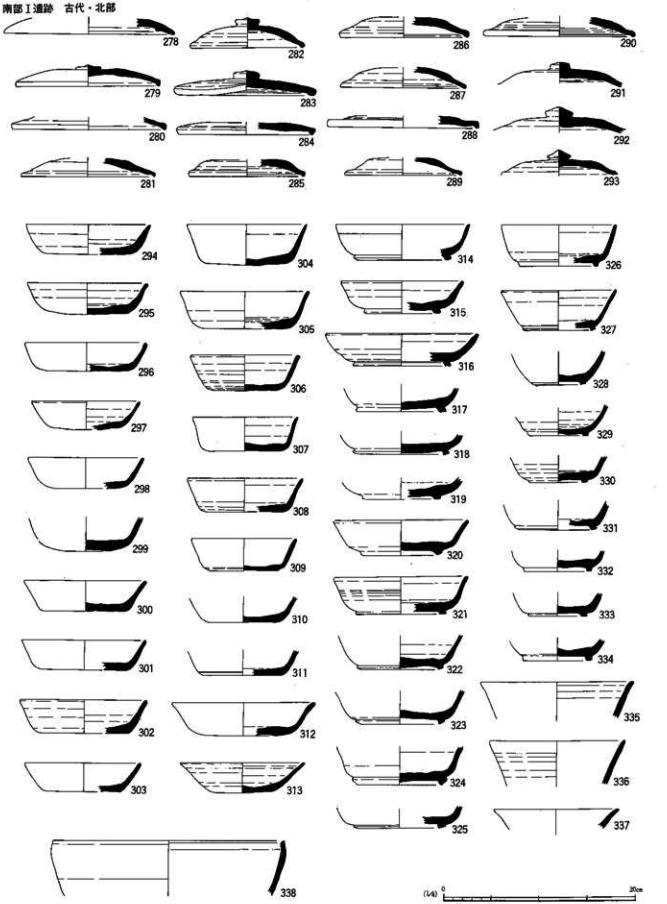
第33図　遺物実測図(1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　中央部　平成９年度調査　CT２：221、CT４：194・208、CT５：205・207・215、CT６：188・203・204・219、CT７：213・214、CT８：199・200・220
平成10年度調査　AT36：201、AT37：222、AT38：192・206・210～212・216・225、AT39：227、AT40：223、AT41：190、BT60：189・224、BT61：209、BT63：202・217、BT64：191・193・195・197・198・218・226、BT66：196



第34図　遺物実測図(1/4)
(南部Ⅰ遺跡)　中央部　平成９年度調査　CT５：228・235・241～243、CT６：229・236
平成10年度調査　AT38：230・239・244・245、BT60：233・237・238・240・246・248・251、
BT64：231・232・234・247・249・250



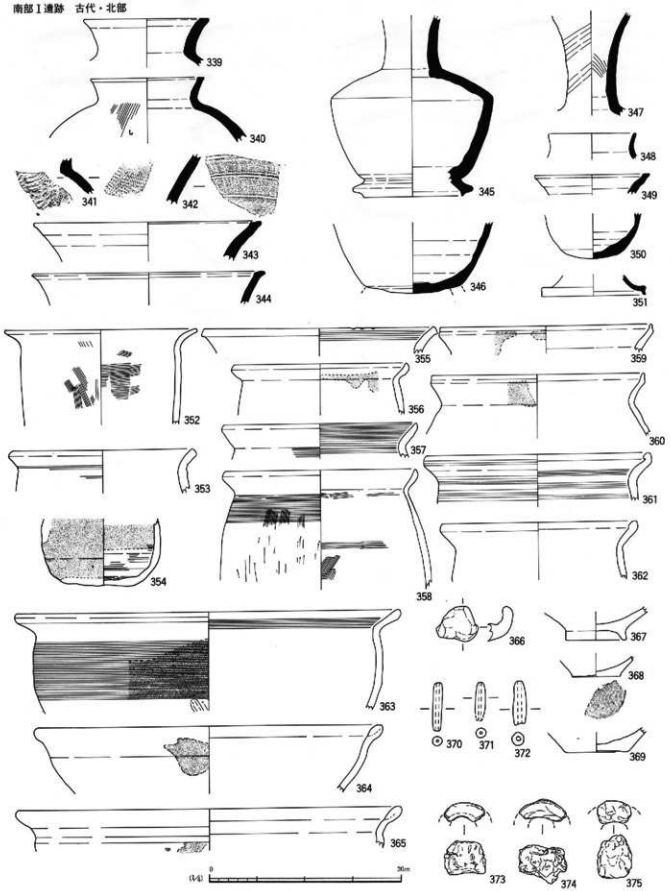
第35図　遺物実測図(1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　南部　平成10年度調査　AT12：256・259・267・270、AT14：257・260、AT19：268、AT20：274、AT21：263、AT24：258、BT21：277、BT25：272、BT26：254・261・262、BT29：252・253・271・275・276、BT36：264、BT38：265・269、BT39：255・273、BT70：266



第36図　遺物実測図(1/4)

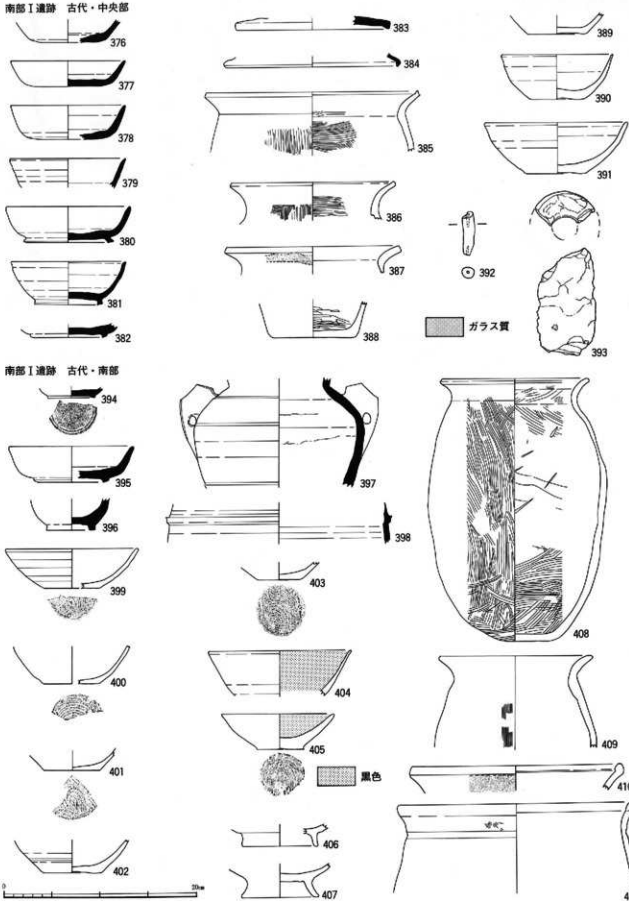
〈南部Ⅰ遺跡〉　北部　平成10年度調査　AT42：304・308、AT46：298、AT47：317、AT48：318、AT49：320・328、AT53：282・284・294、AT54：285～287・291・305・326・329、AT55：300・322・330、AT57：314・331、AT61：280・301・335、AT65：332、BT89：292、CT17：302・315、CT19：313、CT20：306・327・336、CT25：278・279・281・288・323、CT28：337、CT37：316・324・325、CT38：312・338、CT39：289、CT40：293・295・296・303・319・333、CT41：307・311・321、CT42：283・310、CT43：297、CT47：299・309

平成11年度調査　T5：290・334



第37図　遺物実測図(1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　北部　平成10年度調査

AT43：355、AT46：364、AT49：339・345、AT53：342、AT54：341・368、AT55：346、AT61：356、BT89：357、CT11：367、CT12：359、CT17：361～363・370・371・369、CT25：343、CT27：366、CT29：375、CT32：347、CT36：344・352、CT37：353・354・372・374、CT38：348・349、CT39：350・365・373、CT40：351・360、CT47：358、CT49：340

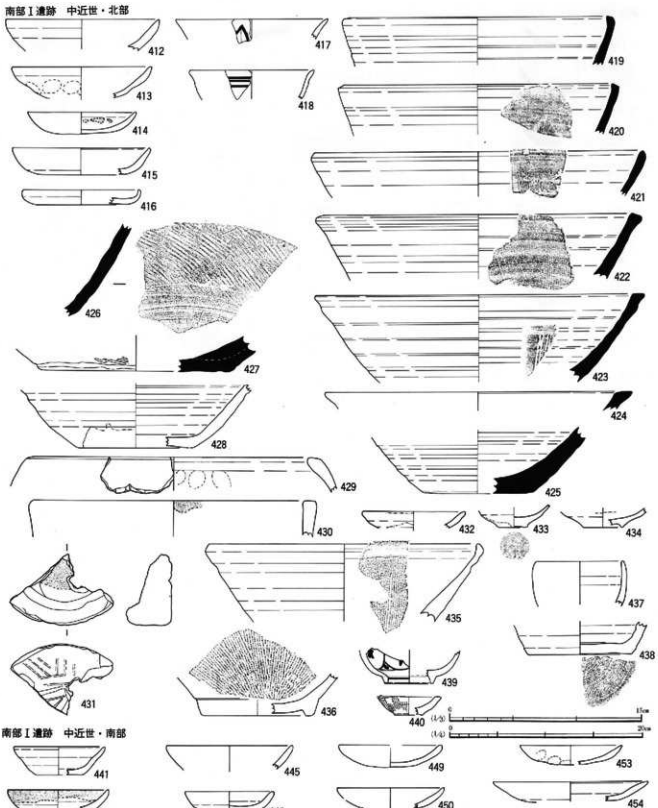


第38図　遺物実測図(1/4)

〈南部Ⅰ遺跡〉　中央部　平成９年度調査　CT４：388

平成10年度調査　AT40：376、AT41：377・378・380・383・385・392・393、BT60：386・387、BT63：379・384、BT65：381・389～391、BT66：382

南部　平成10年度調査　AT24：399～401・406・407、AT25：394、AT26：396・398・402・403・411、AT29：404、AT37：395、BT16：410、BT17：397・405、BT37：409、BT38：408



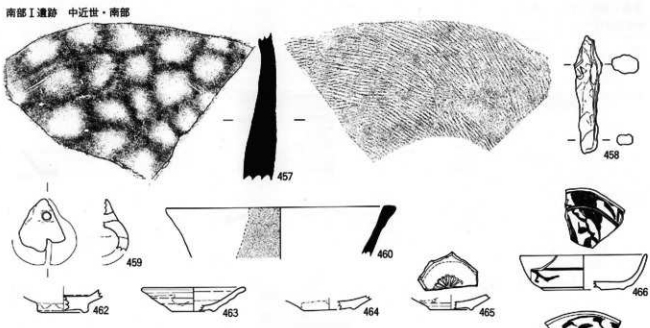
第39図　遺物実測図(412～416、440～456は1/3、431は1/8、その他は1/4)

(南部Ⅰ遺跡)　北部　平成10年度調査　AT42：417、AT46：434、AT60：412、BT40：428、CT 7 ：413、CT 9 ：426・427、CT12：430・436、CT18：425、CT20：423、CT21：437、CT22：440、CT24：418、CT25：415・416、CT30：429、CT31：414、CT32：424、CT34：419～422・439

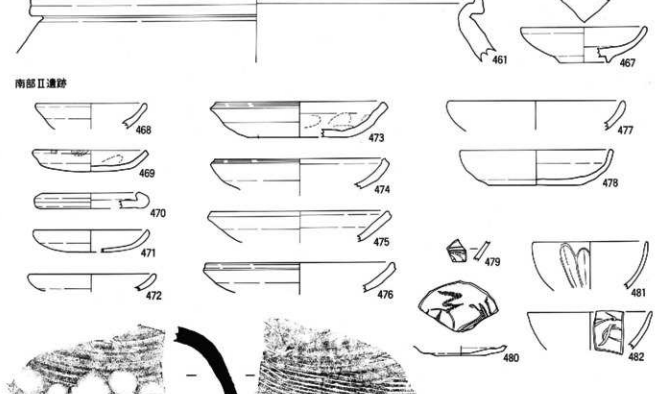
平成11年度調査　T 8 ：435、T 9 ：431～433・438

南部　平成10年度調査　AT 7 ：454、AT16：443、AT20：455、AT22：442、BT10：444、BT28：446、BT37：445・451、BT38：447・456、BT40：441・448～450・452・453

南部Ⅰ遺跡　中近世・南部



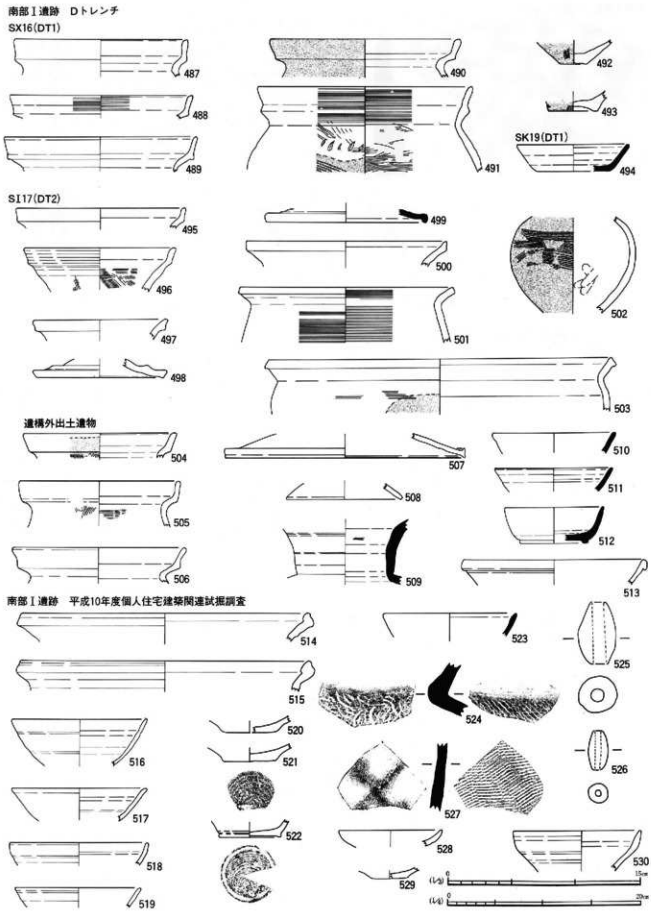
南部Ⅱ遺跡



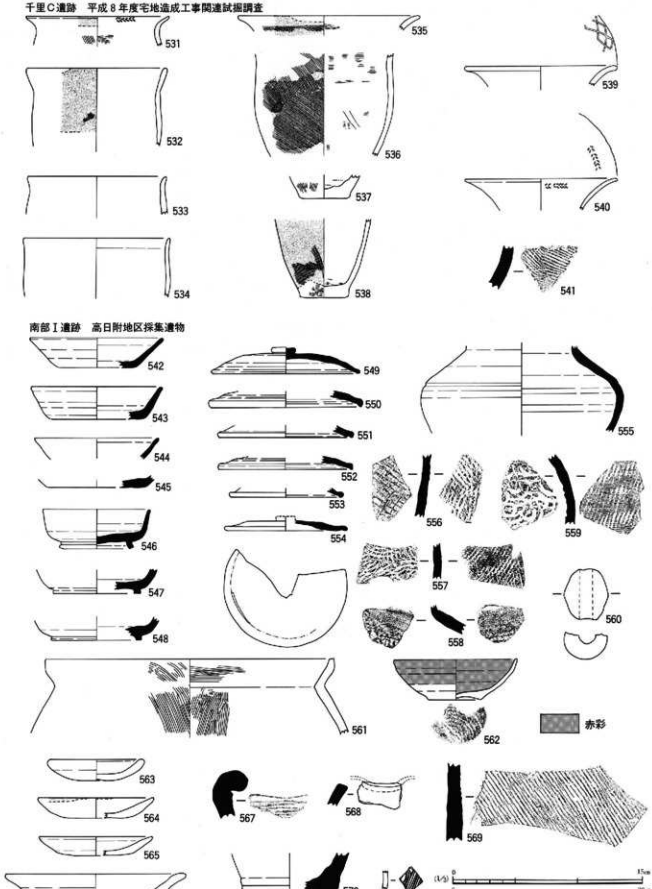
第40図　遺物実測図(459は1/2、468～478は1/3、その他は1/4)

〈南部Ⅰ遺跡〉　南部　平成10年度調査　AT２：465、AT28：461、AT37：460、BT19：466・467、BT24：459、BT32：463、BT37：457、BT40：458・462、BT47：464

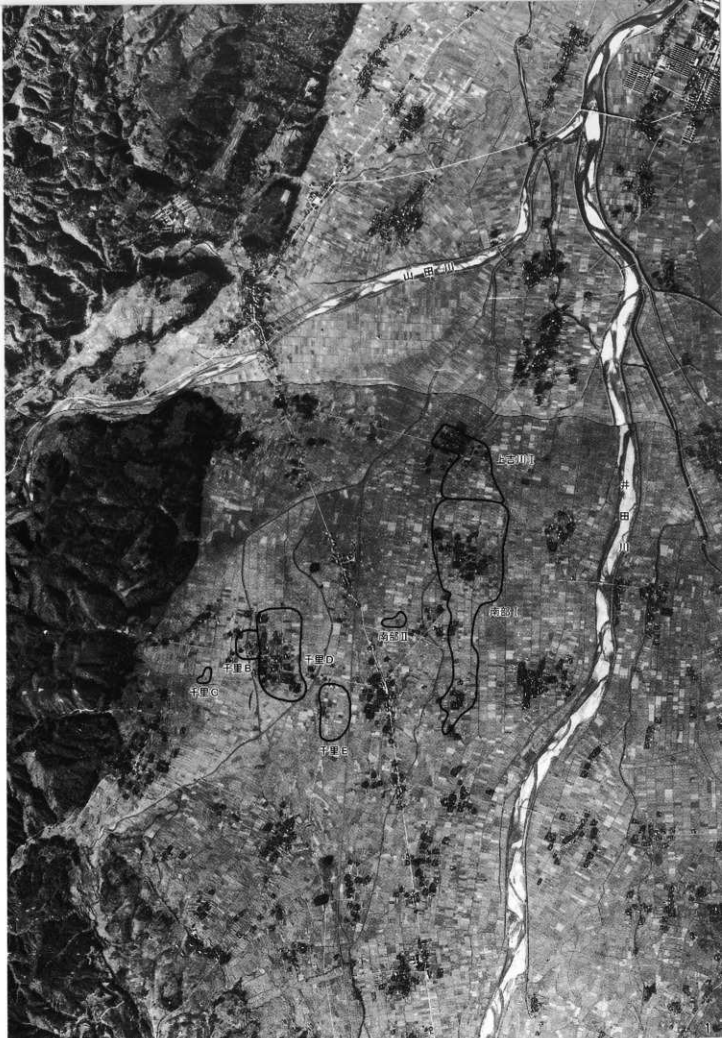
〈南部Ⅱ遺跡〉　平成11年度調査　T46：468～470・473～479・483～486、T58：471・472、T61：480、T63：481、T67：482



第41図　遺物実測図(528は1/3、その他は1/4)
〈南部Ⅰ遺跡〉　遺構外出土遺物　DT 1 ：504・507・509・511・512、DT 2 ：505・506・508・510・513

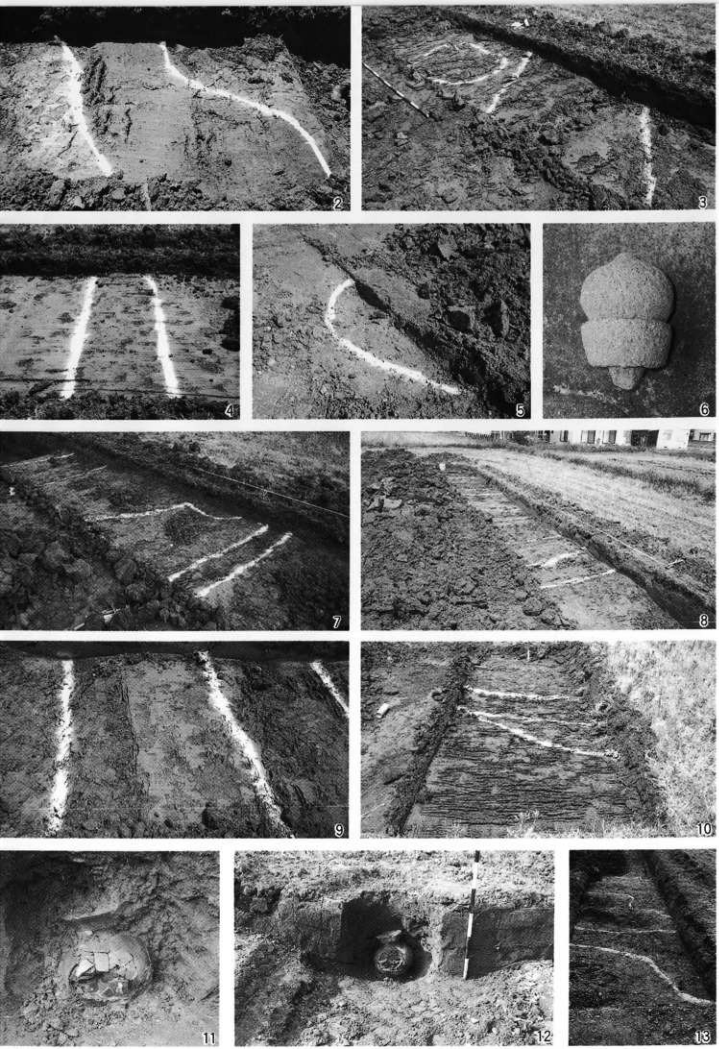


第42図　遺物実測図(563～566は1/3、その他は1/4)
〈千里C遺跡〉　T1：531～539、T2：540、表彩：541
〈南部Ⅰ遺跡・高日附地区〉　地元住民採集：542～544・546～550・554・555・557・560～567・569
平成9年度分布調査：545・551～553・556・558・559・568・570・571

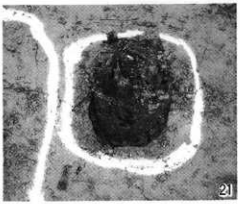


昭和20年米軍撮影

図版1　航空写真(1/25,000)



図版2 〈上吉川Ⅰ遺跡〉 平成11年度調査　2.T54遺構検出状況　3・4.T55遺構検出状況　5.T56遺構検出状況
6.龍王社境内五輪塔空風輪　7.T71遺構検出状況　8・9.T74遺構検出状況　10.T75遺構検出状況
11・12.T75遺物出土状況　13.T76遺構検出状況



図版3 〈上吉川Ⅰ遺跡〉 平成11年度調査　14.T79遺構検出状況　15.T80遺構検出状況　16.T106(西から)
17.T107(西から)　18.T107遺構検出状況　19.T108(東から)　20・21・23.T108遺構検出状況
22.T108漆器出土状況　24.T110遺構検出状況